
モノクロ

なぞる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ

【Nコード】

N3920F

【作者名】

なぞる

【あらすじ】

「見つけたぞ。万人目！」友達との戯れで電車に飛び込み自殺をかましそうになった女子高生が、死神に目をつけられて、天使との抗争に巻き込まれていく。そんな話だと思う。まる。

プロローグ（前書き）

コンセプトは「とりあえず完結する作品を書く！」です。この話はプロローグ＋全二十話＋エピローグで構成されています。毎日更新。既に全部書き上げておりますが、出し惜しみで少しずつ出します。一日にどれほど出すのかは気分しだい。ではどうぞお楽しみください。

ブローグ

この世はモノクロ。

昼は太陽に照らされ、強い強弱のついたコントラスト。
夜は薄墨を溶かしたようなおぼろげな墨絵。

無味無臭。

薄い膜を通したような感覚。

死も生もまるで他人事。

自分の生きる道すら危うげで。

この世はモノクロ。

生きる意味さえ見出せない。

死ぬことすら意味はない。

ただ生きて、ただ死んで。

胸に焼きつく色を求めても感じる心はない。

感覚は蝕まれ、ゆるゆると死んでいく。

いつか死ぬその日までずっとこの世界を生きていく。

死ぬために生きている。

ずっとそう思ってきた。

第一羽 死神？

「見つけたぞ。一万人目！」

突然聞こえた声に驚く。

だが、閉じた目を開けようかどうか少し迷う。もし既に幽霊になっていたとして目の前に自分のばらばら死体が転がっていたりするの
は流石にいただけない。

「？…きこえてないのか？そんなことはないだろう？」

それよりはすぐに天国でも地獄でもいいからあの世というべきところ
ににいると言うのが、理想だ。

「おい、いいかげんにしたらどうだ？」

ああ、なんだか幻聴？が聞こえる。もう既に死後の世界でよくきく
お迎えの声って奴なのかな。それにしても少し口が悪い気がするけ
ど…。

「おいっ！」

「……ぎゃあ！」

突然瞼を押さえられて無理やり目を開かされる。

感じるものは真夏の太陽の照りつける暑さ。

そして目に飛び込んできたのは赤。赤赤赤赤！

赤い髪にカラーコンタクトだろうか、きらきらした宝石みたいな赤
い瞳。この暑いのに赤いコートに赤いインナー赤いパンツに赤いブ
ーツ。ファーはさすがにない。

まるで冬にご活躍の大きな袋を担いだあの人以上に全身真っ赤な男
がいた。

「な、な！」

「漸く目を開けたな。まったく一万人目は世話のかかるな。」

男は宙に浮いていた。

（…ていうか、私も?!）

下を見ても、地を踏む感覚はない。

だが、不思議とぴたりと中空に身体が固定されたように落ちたりもしない。

（ど、どうなっているんだ！？これは！）

混乱する。横を見ると私の身体からあと数センチと言うところで電車が止まっていた。運転手が驚愕の表情で止まっている。ピクリともうごかない。

赤尽くめの男の手があるから顔は動かせなかったが、眼球だけで周囲を見ると何もかもが止まっていた。

無音、無動の世界。ホームを見ると、慌てたようにこちらに手を伸ばす級友の姿が目に入る。その光景を見て私は自分の陥った状況を感じ出した。

その日、私の通う高校はテストの返却のためだけの授業で、半ドンで帰らされていた。

テストの終わり、後は夏休みを待つばかりという雰囲気がいけなかったのだろうか。

私は友達と駅のホームで会話をしながら、電車を待っていた。そこでの会話に盛り上がった友達が私の背中を押した。

所詮はふざけあいの軽い力だった。

だが今日はとても暑い日で少々私も体調が優れなかったというのが、重なり、押された途端私は貧血を起して、ホームから線路に向かって倒れそうになった。そこに偶々電車が入ってきて私を…。

そこまで思い出して、私ははっとした。

どうして私は。生きているのだろうか？

なぜ電車が止まっている。あの距離で私をはねずに止まるのは無理だろう。だが実際に止まっている。いや電車だけでない。

皆止まっていた。暑い日差しは相変わらずだが、あれほど煩かった蝉の鳴き声がまったく聞こえない。

私はホームにいる友達の姿をもう一度見た。それはとても躍動感に満ちていて、まるで動画の一場面を切り取ったように時間が止まっているように思えた。

「どうして…。」

「私が時間を止めたのだから。」

顔を押さえる男がそう口にした瞬間、私の体の固定が解け、落下感が復活し、私は一瞬で地面に投げ出された。

受身を取り損ねて、電車の枕木にしたたかに尻を打ちつけ、私は言葉も出さず悶絶する。

そこへ中空にいた男が降りてきて、私の前に降り立った。

足音はしない。ふんわりと翻るコート。見上げる先に白皙の美貌がこちらを見て皮肉気に微笑んだ。

「さて、初にお目にかかる。当たり前だがね。一万人目。私は死神アストラル。君の魂の捕食者。未来永劫の君の主だ。」

第二羽 電波？

やけに芝居がかった台詞をはきながら赤尽くめは私を見下ろす。
聞き間違いだろうか？死神？

私はぽかんと男を見上げる。

改めて見上げる男は背がかなり高い。百八十以上はありそうだ。

髪と目は赤い。鮮やかな赤だ。明らかに地毛とは思えない。目も力
ラーコンタクトだろう。

だが、日本人とは程遠い顔立ちをしているのでアストラルという横
文字の名前に驚くことはない。彫りの深く、ハリウッドでもそうは
お目にかかれないほどの綺麗な顔立ちだ。

「ん？なんだ。私に見惚れているのか？まあ、仕方ないが。」

呆気にとられて何もいえない私の前で赤尽くめの美形は何度も頷く。

「だが、のんびりしている暇はない。天使どもがいつお前の魂を見
つけて飛来するかわからないからな。そうなるといういろいろ厄介だ。

死んだ直後の魂はすぐに天使が連れて行ってしまふからな。奴らを
出し抜くのはなかなか骨が折れるのだ。だから…すぐにここを離れ
て…、て、なんだその顔は。」

私は思わずかわいそうな人を見る目つきになってその人を見ていた
のに気付いて赤尽くめは私を睨んだ。だって、顔はこんなにいいの
に、いい大人が天使だの魂だの、電波だなんて。

（かわいそうな人。）

「…なんだろうな。なんだかなり失礼なことを思われている気がする
のだが。」

「…気のせいよ。」

私は漸く混乱から立ち直り、いや、正直混乱したままだったが、い
つまでも線路の上で呆然としていると次の電車が来て轢かれてはた
まらない。

落ちたときに着いた砂埃を払いながら立ち上がる。清楚で上品だと

周りからの評判は高い制服だが白はこういつとき汚れやすく嫌いだ。

それからぐるりと再びあたりを見回す。いまだ、周囲の時間は止まったかのように私と赤尽くめの男、アストラル以外動くものもない。あれほど煩かった蝉もまったく聞こえず、静寂だけがあたりを支配していた。

一体どういったことなのか。どういう状況に陥ったのか考えても説明はつきそうにない気がする。

（とりあえず）

私は早々に考えることを放棄して、夢だと結論付けた。訳がわからない妄想の世界が私の中にあつたとは信じたくないが、それ以外に考え付かない。

私はアストラルに向き直った。

「あの、貴方が私を助けてくれたの？」

今まで考えた状況的に電車に轢かれて死にそうになるというなんとも奇妙な夢であるにしても、状況的に時間を止めて助けてくれたのはこの赤い自称死神男であるので、一応聞いてみる。だが男は答えず別のことを聞いてきた。

「…ほう。この状況で驚かないのか。」

「…ええ、まあ。驚いてはいるけど。」

「なかなか肝が据わっているな。流石は俺が選んだ一万人目だ。普通は泣くとか叫ぶとか錯乱すると思うのだが。」

「はあ、まあ。」

だって夢だし。でもたとえ夢でも錯乱するなどという失態を犯しなかった。

「で、どうなの？」

「…そうだな。確かに時間を止めてお前の死ぬまでの時間を遅らせたということだけを見れば助けたというのかもしれない。だが、それでは語弊に繋がるな。」

「語弊？」

私は首を捻った。

流石は私の夢だというべきなのか。どういう考えでこんな夢を見るように思考回路が繋がったのかわからないが、電車で轢かれそうになって、時間を止めて助けてくれた男にはどうも目的があるらしい。いわば下心つきという奴だ。

私の夢なのに無償だとかご都合主義的に進めばいいものを面倒くさい展開にしたものだと思う。

一応今後の展開に繋がりそうな過去の事象を思い浮かべてみる。だが、こんな夢を見るほどファンタジーな思考が自分にあったこと事態驚きなので、今後の展開がまったくわからない。首をかしげていると、赤尽くめは悩む私を笑った。

「まあ、人のお前にはわからないんだろうけど。」

「はあ。わからないけど。」

素直に認めると、アストラルは頷いて、どこか奇妙に凄みのある笑みを浮かべた。

「俺はお前の魂をもらいにきたんだ。一万人目。」
「ストーリー思考。そうか。そう来たか。」

電波の上にストーリーカー。あまりにも救いようのないコラボだ。

めったなことでは動じないつもりだったが、やばい。こんな輩の出る夢を見るとは私の思考回路は一体どうなってしまったというのか。自分の頭の構造に若干不安を覚える。

こういう夢の場合、どう対応していいのかわからず、固まっていると男の身体がこちらに近づいてきた。

それを見てとりあえず現実の自分なら確実にするであろう行動に出た。

つまり逃げる。だが、男と視線が合った途端、なぜか足が動かなくなっ

った。
「やつ！な、ナにこれ?!」

どういう理屈かわからないが、恐慌に陥る。一体どうなっているの

だろう。まったく自分の夢なのに融通が利かない。

「むだだ。人間。今更逃れられない。」

男の顔が歪む。丹精で綺麗な顔立ちに獰猛な肉食獣の色を見て思わず怯んだ。そうしている間に男の身体がすぐ近くまで来ると身長差から覆いかぶさるように身を屈め、私の顎を捉えた。私は目を見開いて硬直する。

私は昨日見た二ユースのストーカー殺人を思い出す。交際を断られた男が白昼の堂々と女性を刃物でめったざしにしたという。生きたまま何度も顔をさされ何百箇所と切り刻まれて女性は殺されたと二ユースキヤスターが淡々と読み上げるのがまざまざと蘇る。私もそんな風に殺されるのだろうか。

それを想像したところで、私は逆にその思考に顔を青くする。これは私の夢だ。そんなことを考えてしまえばきっとこの男はこの考えの通りに、行動してしまうだろう。

今のところは赤尽くめのアストラルと名乗ったこの男は刃物は一度もちらつかせていない。だが、この糞暑い中に着ているあの黒いコートの中に刃物がないなんて誰がいえよう。

私はこれから感じるであろう痛みを想像して震えた。

「私を殺すの？」

「殺すのではない。魂を取り込んで私とともに永劫に生きるのだ。それにお前は俺にとって一万人目の獲物だ。お前を取り込めば漸く神と対等のいや、それ以上の力をつけることが出来る。そうなれば俺は神を倒し、新世の神となる。つまりお前も神の一部となれるのだ。」

ありがたく思えよ、と電波な台詞を吐きつつ、男が更にこちらに顔を近づける。今にも顔同士がくっつきそうな距離。状況が状況でなかったら、男の顔に見惚れていたくらいの美形だが、この男は電波でストーカーで殺人者になりかねない。危険だ。思わず、翌朝の朝刊の見出しが思い浮かぶ。

【無残！女子高生！ストーカー殺人！！】

【刃物で滅多刺し！原形とどめず。数時間後に死亡確認。】

（いやあああああああ！）

想像して心の中で叫び声をあげる。

いや、まあ夢の中の世界のことだからそんな新聞が出ることは実際にはないのだろうが。

でも嫌だ。夢でもそんな言葉の似合う痛さはいやだ！私は涙目になった。

「は、刃物だけは・・・。」

私が混乱して懇願すると、アストラルは怪訝そうな顔をする。

「？なんだ。刃物を使って欲しいのか？おかしな奴だな？」

「いや！そうじゃなくて！」

慌てて訂正するも、アストラルはいっそ善人のような清清しさで笑って見せた。

「ははは、そう構えるな。いくら恐れ多くとも、俺も今はまだ死神の身分でしかない。それに大丈夫だ。そんなに身体から魂を抜くときは痛みを感じない。ただ、取り込んだ後、三日ほど魂の拒否反応が出るから、その間浄化の炎に焼かれたほうがましだというほどの痛みを感じるかもしれないが、神と同化するのだ。安い代償だろう？」

「いやじゃあああ！あほお！」

痛いのは嫌だと思っているのに。

悪魔じゃ！いや、死神とか言っただけで、人の顔を被った悪魔だ！

「別に死ぬのはいいけど痛いのはいやぁ！」

私は力の限り、絶叫した。夢の中で死んでしまっても、現実で死ぬわけじゃないからどうでもいい。まあ、そうじゃなくても死んでも差し支えはしないのだが。

だが痛いのは違う。痛いのは夢でも痛いに決まっている。

「：おかしな奴だな。死ぬのは良くて、痛いのは嫌なのか？」

「当たり前だ！鬼！悪魔！人でなし～～～！」

そうわめきながらも何とか逃れる方法を探して頭をフル回転させた。そこで思いつく。

（あ、これって夢なんだから。）

よく夢の中で痛い思いをすれば、すぐに目が覚めるのではなかっただろうか。

よくマンガや物語の主人公とかは頬を抓って現実かそうでないか判断していたように思うし。まあ、そのパターンの主人公とかって実際に痛い思いをして、それが現実だって知るのがセオリーなんだけど。

でも、まあこれは確実に夢だし。

きっとこの男がナイフでぶすりとかした瞬間に、きっと目が覚めるはず。

夢の中だって痛い思いをするのはごめんだから、できるだけ痛い思いを感じる前に起きれるといい。

そう思うと安心して私はわめくのをやめた。

第三羽 現実？

「……？どうした、もう早々に諦めたのか？」

突然おとなしくなった私にアストラルが怪訝そうな視線を向ける。
だが気にしない。

だってもうすぐ夢から覚めるのだから。

「……随分と物分りのいい一万人居たものだ。だがそのほうが都合がいい……っ！」

それまで朗らかともいえたアストラルの顔が突然引き締まったかと思うと、私の腰を突然抱いて、その場から跳躍した。

次の瞬間直前まで私たちのいた空間に巨大な光のような槍が飛来したかと思うと、地面に触れるや否や大きな音を立てて爆発した。

「っ……！！！」

爆風に煽られたためか、ただの跳躍とは思えないほど、高くアストラルに抱きかかえられるように中空に吹き飛ばされる。

その際に、爆風で飛ばされた瓦礫の一部が私の頬に当たり、鋭い痛みを走らせた。

「っ痛！」

頬に手を遣るとぬるりと暖かい感触がして血がべったりと付いた。
ずきずきと痛いその感触に呆然となる。なぜ。

（なんで！目が覚めないの！？）

痛む頬を押さえながら、下を見ると大きくえぐれた線路の部分と駅舎の屋根が見えた。

こんなところから落ちればただではすまない。私は思わず落下に備えて目を閉じた。

だが、いつまでたっても落ちる気配はない。そつと目を開けると、私を抱えたアストラルが平然と立っているのが見えた。空中に。

「っ……！！！！！」

あまりのことに叫び声もあげられない。私はただ驚愕の面持ちで私

を抱えている男を見上げた。

頬の痛みを意識しながら混乱する。

一体これはなんだ？夢じゃなかったのだろうか？

でもそれならば、なぜこの切られた頬はこれほど痛い。なぜ目が覚めないのだろうか。

私は周囲をもう一度見回した。どうして誰も動かない。

夏の盛りの外でどうしてこれほど静かだ。さつき飛来して爆発した光はなんだ。

そしてこの男は……。なぜ宙に浮いているのだ？

何もかもがわからないが、何もかもがある一つのことを示しているように思えた。

「あ、貴方は……。」

彼が今まで話していたことは私の嘘でも妄想でも電波でもないのだろうか。

これは。現実なんだろうか。

「一体、何者？」

驚愕で瞬きすら忘れて凝視するこちらに、男は首をかしげた。

「？……さつき名乗ったと思うのだから。俺は……。」

「死神！覚悟！」

再び強い光が極近い場所にあり、こちらに向かってくる。先ほどの爆発の様子を知る側としてはあんなものが直接当たればただではすまないことはわかる。

だがよけきれぬ距離ではないと思った。

私はとりあえず即死出来るように祈って目を閉じた。だが男は平然としている。

「……バカが。能天使パワーズごときがこの俺に傷でもつけられると思うてか。」

男がなぜか光に向かって手を伸ばす。現実だと悟った以上、それが自殺行為だと感じたが止める間もない。私はその後の惨劇を想像して目を閉じようとした。だが。

ばつぎ、と鋭い音とともに光が霧散する。

そのあっけなさに呆然とする。もしかしてさっきの爆発を伴っていたものより威力が弱かったのだろうか。

「っち！流石にこれごときでは倒せないか。」

声の聞こえたほうに目を向けてまたもや驚く羽目になる。

そこには天使がいた。そう。天使。それ以外に形容の仕様がなほど天使。

波打つ黄金の髪。深い自愛をたたえているだろう海のような深い青い瞳、布を巻き尽きたような白い衣服。腰には美しい装飾の施された剣を差し、美しい彫刻のような整った顔立ちをしている。そして背中の純白の鳥の羽。その羽が一生懸命に羽ばたいてそれに繋がる人体を中空に停滞させていた。おそらく本物。

私は自分の頬をに手を載せた。…確実にそこは熱を帯びてじくじくと痛みを訴えている。

本気でこれって夢とかお芝居とかドラマのロケとかじゃなくて本気の現実なんだろうか。

この赤い電波男の言っていることも本当だということのか？

魂、死神、天使。一万人目。

くらくらしした。

第三羽 現実？（後書き）

二羽分アップです。
死神に天使の襲撃。
べた？
でも続きますよ。

第四羽 能天使？

だが、現実には待つてくれない。

天使は普段はおそらく微笑を貼り付けているだろう白皙の美貌を歪めた。

「おお、おぞましい死神。彼女を離しなさい。彼女の魂は我らが神によつて召され選定されるもの。お前ごときの私利私欲のために使われていいものではない！」

「やかましい。中級三隊の下ごときが、大きな口を叩くな。」

「なっ！死神ごときにそんなことを言われる筋合いはありません。さあ、彼女を離しなさい！さもなくば消えることになりますよ！」

天使はすなりとその腰に下げた剣を抜いて見せた。私はその手の刃物に詳しいわけではないが、おそらく本物。鉄製なのかなんのかきらめく剣先は鋭く尖り、それで風ぎ倒されたものはおそらくただでは済まされない。

「ほお、やれるものならやつて見るがいい。ほえ面をかくのはそつちだな。」

だが、アストラルも負けてはいない。その剣に恐れなど微塵も感じていないような余裕のある表情で相手を挑発している。

「死神が……！神の身元に召される聖なる魂の略奪者よ。今その罪を悔いを改めるならば、助けてやろうと思つたのに。残念です。」

慈愛深きその表情は自分を侮辱したであろうアストラルに対する失望がありありと見て取れた。なんだか、その表情に私はなぜか、不快な感じを受けて眉をひそめた。

「ふん！思い上がるな。お前ごときに救われる人間など物の数だと思え。それに助けてやろうという言葉はむしろこちらの台詞だな。今去るなら見逃してやる。とつととされ。」

アストラルがまるで犬でも追つ払うような仕草で手を動かす。完全に侮辱され天使が顔を真っ赤にした。

「な！そんなことできるわけないでしょう！とにかく！何が何でも彼女の魂は神の身元に連れて行かせてもらいます。お前の好きにはさせない！」

天使が剣を構えなおす。その姿を静かに見ながら、詰まらなさそうにアストラルが目を細めた。

「ああん？出来るのか？お前ごときが？」

「無論！行きますよ！だりゃ！」

天使が剣を構えて突進してくる。対するアストラルは私を抱えたまま微動だにしない。

私はその腕の中でもかく動けずに戦況を見守り続ける。ともかく下手に暴れたら、この戦いに巻き込まれるのが目に見えていたからだ。まあ、驚きすぎて動けなかったと言うのはあるけれど。

上段から大降りに降られた剣は光り輝き、アストラルに迫る。

だが、アストラルは慌てず、それを横に半歩分動いて交わす。鋭い切っ先が紙一重で流される。それから天使が何度か剣を振るったような気がしたが、あまりに早すぎて私には見えなかった。だが、そのどれもアストラルにかすることもなく、いなされる。

何度の攻防だったのかわからないが、アストラルは不意に今までとは違う動きをしたかと思うと。一瞬で天使の剣の刃を捕まえた。それも指二本で。

流石に天使もこれには驚いたようでその美しい顔に驚愕の表情を浮かべた。

「なっ！ば、バカな…！？」

「…だから言っただろう？お前ごときが敵う相手じゃないと。相手の力量も読めないような者が能天使だパワースとはいつの間にか天界の質も落ちたものだな。」

「っ！貴様！くっ！」

逆上した天使が剣をアストラルの指から抜こうとするが、剣はピクリとも動かない。その時点で双方の力量の差は絶対的に素人の私でも見て取れた。

「さあ、遊びの時間は終わりだ。とつとつ、天界に帰って……いや。」
アストラルが笑う。私はその笑みを見て、全身に鳥肌が立つのを感じた。

「ここで消える。無能なものは天も要らないだろう？」

一体いつ力を掛けたのかすらわからない。だが、確実にアストラルが触れた剣先がびしりと歪な音を立てて、ヒビがはいり、広がった。
「なっ！ひっ！」

天使の顔が青ざめた。剣は動かずびしぴしと言う音が漏れて、やがて剣は小さな鋼の塵と化して高い音を立てて砕け散る。

天使は柄だけになった剣を握って呆然とする。その顔色は既に青さを通り越して白かった。

圧倒的な力。指先二本に全身の力をすべて使っても拮抗すら出来ないほどの、圧倒的な差が目の前にある。

「あ、あ……。」

天使は逃げることも忘れて棒立ちになっている。

アストラルが目細めて、剣を砕いた手を天使の顔の前に翳した。

その手が次第に光を帯びる。赤い炎のような陽炎が手にまとわりつきゆらりと揺れた。

それがなんなのかわからないが、だが不吉なものであることだけはわかった。

アストラルは楽しそうに口は歪めた。

「消える。」

「っ！」

手から赤い光が放たれる瞬間、私はとつさにアストラルの腕から逃れ、天使に翳されていた腕にその全体重を掛けた。

「なっ！？」

「！？」

私の体重で何とかずれた腕から放たれた光は天使をかすり、地上に落ちていく。その光が地表に着床するとすごい轟音とともに爆発が起きた。

「うわっ！」

腕にしがみ付いていると言う不安定な体制だったため、その爆風を受けて思わずアストラルの腕から離れて飛ばされる。くるくると飛ばされ落ちていく。

「っち！ばか！」

アストラルの舌打ちが聞こえたかと思うと、割とすごい勢いで飛ばされたのに気付くとアストラルの腕の中に取り込まれていた。

（…あ、危なかった。）

流石に飛ばされたときにひやりとしたのか、心臓がバクバク言っている。いくら死んでも言いと思っても、いざそうなることの怖さはどうしようもない。

アストラルの安定した腕の中から爆発した方向を見るときのこ型の煙とその中で同じように地表に落ちていく天使の姿を見つけた。少し服の端がこげているように見えるが、全体的には無事な様子にほっとする。流石に目の前で誰かが傷つけられるのを黙ってみていると言うのはばつが悪かったからだ。

気付くとアストラルが降下を始めていて、気付くと地面が近づいていた。

そのまま地面に下ろされ、アストラル自身も着地する。

中空体験はなかなか出来ないからある意味興味深くはあったが、やはり地に足が着いているのが安心できていいと改めて実感する。

ほっとした次の瞬間、突然アストラルに胸倉を掴まれる。身長差から宙吊りにされて、息が詰まる。真っ赤な目が今にも射殺しそうなほど憎悪に満ちて私を睨んでいる。私はひやりとした。

「…なぜ邪魔をした。」

低く唸るような声。自然と肩が震えた。圧倒的な力の差。体格差においても既に勝ち目はないのに、相手は人外の力を持っている。逃げることもすら敵わぬほど絶対の差。私は声を出すことも出来ずに呆然とアストラルを見つめ返すことしか出来ない。

「天使は一体ではそう厄介な存在ではない。だが、軍団になるとそ

うは行かない。一匹の逃すだけで仲間を呼ばれると厄介なのだぞ。」
「…ごめん。」

弱弱しく謝ると、アストラルの表情から少し怒りの感情がそげて苦虫を噛み潰したような顔をした。

「…もういい。だが、もう二度とするな。」

掴まれた胸倉を放りだされて漸く息がつけるようになる。苦しくて少し滲んだ目じりの涙をぬぐう。

「…悪かったよ。でも既に相手は戦意喪失しているのに殺す必要はなかったと思うし。」

けほけほと咳きをしながら言い訳すると、深い溜息を吐かれた。

「…あの攻撃を受けていたらお前の魂など身体ごと消し飛んでいたんだぞ。」

「…え？」

そんな怖い攻撃だったのか。まあ、あの光が着表した場所の跡に昇ったきのご雲を見れば確かにそれほどの威力だと言うのは判る気がする。

「…でも。そんな攻撃を人に使おうとするなんて・・・。」

「ばかか！お前は。あれは敵だ。お前の魂を奪おうとした。死に値する行為だ。殺されたって文句はいえんだろ。それに、さっきも言っただろう。天使は下手に生かしておく、後々仲間を呼ばれて厄介なんだ。殺しておくに越したことはない。」

「…邪魔して悪かったよ。でも見ていられなかったんだ。」

死神だから、ひどく怖い顔をして天使を殺そうとしたアストラル。必要とあれば相手を消す。それは戦争と言う意味では残酷だが有効な手段なのだろう。だが、それを自分の命の取り合いでされるのはごめんだ。どちらが殺されてもなんだか、自分が悪いみたいな気分を味わう羽目に張りそう。

「…慈悲深いことだな。胸が悪くなりそうだ。」

アストラルが本当に不快そうに顔を顰める。

「…別にそんなつもりはないよ。ただ自分のせいで誰かが死ぬのが

嫌なだけだ。」

私は目を伏せた。

「ただの自己満足だよ。」

自嘲じみた笑みを浮かべると、アストラルが虚をつれたような顔をした。

「…お前は…。いや…。まさかな。」

何かに気付いたような顔をしたかと思うと、すぐに否定するように頭を振った死神に首を傾げる。

「…なに？…っ！」

不意に後ろ髪をつかまれ、あお向けられる。アストラルの身体が覆いかぶさり、顔が又も間近に迫る。

「…お前には関係ない。それに魂の判定など取り込んでしまえばすぐにわかる。お前を食らえば…。」

頬の線をアストラルの手がなぞる。私は目を見開いてなすがままになる。

第五羽 死ぬ？

「…それって、私、死んじゃうって言うこと？」

それまではアストラルの言葉は夢の中のことだと思っていたから、話半分にしか聞いていなかったが、現実だと認識した以上、そうは行かない。と思った。

「…、肉体的にはそうだな。」

だが静かに死神を名乗る男にそう宣告されても私は。

「そう…。」

まったく動じることが出来なかった。

私にとっては死ぬことはそれほど嫌なことではなかった。だって。
(ずっと、死にたかった。)

いや、ずっと生きていたくないと思っていたというのが事実か。

私はずっと、生活しながら、友達と談笑しながら、ずっとそんな思いに囚われてきた。

私にとって世界は空虚で色のない無感動な世界だった。

何を見ても、何を食べても感動なんかしない。心を動かされることはない。

まるで色を感じない。音のないモノクロの映画を見ているような感覚。

いつも薄い膜を隔てているようで、スクリーン上の動画を見ているような手ごたえのない感覚。一体いつ頃からこのように感じるようになったのかはつきりとは覚えていないが、だがこんな世界に生きることの意味を見出せなくなって久しい。

それでも、死ぬほどの勇氣はなく、惰性的に生きてきた。

周りに流され、相手に反論するのも面倒で衝突しないように、収める技術だけを磨いてきた。協調性といえば綺麗だが、ただ自分の意見を考えたり言ったりするのが億劫だった。

だって、言っただってどうなるというのだろうか。世界を動かせるほ

ど私の存在は大きくはないのに。

だからいつも誰かが殺してくれるのを願ったり、事故で死ぬことを考えたりした。ストーリーカー殺人の記事だって、あれは誰にも話したことはないが、死んだ人間に羨望すら感じた。

だから、死神に死ぬことを宣告されても怖さはなかった。むしろ安堵さえ浮かんで私は微笑んだ。

「……どうして、この状況で笑える。」

「死ぬのは怖くないんだよ。」

心が麻痺しているといわれたらそうなのかもしれない。私は生き物にあるといわれた生存本能が著しく低下しているのではないかと思う。

「だけど、一つだけ遣り残していることがある。」

そう。一つだけ今日という日でなければ、思うことはなかった。だが今日であるからこそその心残りがある。

その言葉を聞いた死神が、なぜか少し安堵したような顔をしたかと思うと、すぐに皮肉げな表情を浮かべた。

「……なんだ。今更命乞いか？死ぬのは怖くないといったその口で。」

「……それは本当。死ぬのは怖くないよ。ただ。……ねえ、少しだけ時間を与えない？」

「なんだと？」

「私が消える前に、行きたいところがある。そこに行きさえすれば、後は好きにしていいいから。」

まっすぐにこちらに視線を向ける死神から視線を外さないようにしつつかり、見返す。

先ほどの戦いを見ていてどう考えてもこちらに選択の余地はない。何をやるにもこの死神の気分一つで決まるだろう。

私に出来ることはただ黙って采配を待つだけだ。

じっと見詰め合っていた私たちが、不意に死神がその視線を緩めた。

第六羽 契約？

「…お前は どうして、私から目を逸らさない？」

望みとはまったく関係のないことを言われて困惑する。

「？…なんでそんなこと。」

「お前も気付いているはずだ。私の邪眼に。」

「邪眼？」

聞き返すと邪眼について教えてくれる。

「私は目を見たものを意のままに操ることが出来る。お前を縛り付けるのもそうだ。」

「…でもそんなの知らなかったし。」

「じゃあ、今、知っただろう。それを知ってもお前は…。」

「…そんなことを言われてもね。」

私は死神の真意が読めなくて困惑する。

大体人の目を見て話をするのは、人と話すことの基本ではなからうか。

私はそれがある人との約束の中で徹底的に躰けられたから今更、それをやめるのもある種苦勞がある。

「癖なんだ。すぐには変えられない。」

そう言うしかなくて、じつとアストラルの目を見る。確かに思い出してみれば、金縛りにあったりするとき、必ずアストラルの目を見ていた気がする。だけど、それが邪眼なんていう物騒な名前のものだとは知らなかった。

私はアストラルの目を改めて見つめる。その目は宝石のように赤くきらきらしていて一度も私を飽きさせることがない光に満ちている。最初に会ったときから常々綺麗だと感じてきた。今もそうだ。綺麗な鮮やかな赤。暫く感動なんてしたことのない私の心が珍しく感じた美しさだ。

どれだけ見詰め合っていたのだろう。あんまり見つめすぎたのか、

逆にアストラルにたじろがれる。かすかにそらされる視線にちよつと残念に思う。

それがあんまり残念だったものだから、私は思わず思ったことを口にしていた。

「でもさ、邪眼だつて言われても見るのをやめられそうにないよ。

アストラルの目つて綺麗だから。」

「っ！」

あんまり宝石つて興味はなかったけれど、アストラルの瞳はきらきらしていても好きだといえる。日本人の目は黒が多くてつまらないけど、赤くて綺麗で透明でとても好きだといえる。

するとなぜかアストラルの頬が朱に染まる。

「お、お前は…。」

アストラルが私から視線を逸らして、何事かぶつぶつという。

「これは、本物か？…いやだが、もし違つたら…。…さっきの天使を逃したから、あいつが軍をそろえてくると厄介だから時間もなし…。」

何事か考えを巡らせる死神。私はその言葉に息を吞んでじつと采配が振られるのを待った。

そして死神はその答えを出したようにこちらに視線を合わせた。

「行きたいところがあるといったな。…どこだ？」

「…いいの？」

「…一つ条件を飲めば。」

「…条件？なに？」

条件の言葉にぎくりとする。一体死神の条件というのはどんなことだろう。

痛いことだと嫌だな。

だが身構えた私に軽い調子で死神は答えた。

「契約だ。お前の魂に俺のものだという印をつける。」

「…しるし？」

マーキングのようなものだろうか。一体どうやるのかと思っていた

ら、突然死神が私の制服の上着の裾から手をつ突っ込んできた。

「うわっ！？なにすっ！？」

「煩い。…黙っている。」

その言葉と同時に視線を合わせられ、金縛りに掛けられたかのように私は一切の動きを封じられてしまう。なるほど、これが邪眼か、などと一瞬状況も忘れて感心する。

硬直させた私の胸の上を死神の手が何かを探るように動く。むずむずした感覚に顔から火が出そうなほど恥ずかしい。

「…ここか。」

その手がちょうど胸の間、心臓の上に達したとき、動きを止める。何をするのかと思っていると、死神が何事か唱え始めた。

【La La , e l o g i e , e n t r e n o i n
f e r n o a s t r a l , e m e u n o m e f a z . . . ;
…】

それは呪文のようなものだったのだろうか。だが、私には何の言葉なのか聞き取れなかった。高い歌うような声。

死神の歌なのに、禍々しさはいっそ感じない。澄んだ綺麗でまるで聖なる歌声に聞こえた。

だが、歌が進むにつれて私の胸に当てられた手が赤い光を帯び、熱くなり始めるのに気付いてそんな悠長なことを言ってられなくなつた。

先ほど天使に向かって放たれた赤い光が今私の心臓の上にある。

（じよ、条件と言いながら、問答無用で殺す気！？）

話が違ふと思うが、動きが封じられている以上逃げることも出来ない。

胸の上にある手はどんどん熱量を増し、火傷しそうなほどに熱くなる。まるでその下にある心臓をすべて焦がしつくさんばかりの熱量に私は知らずに悲鳴を上げていた。

その熱は心臓を通る血を媒介として体中に広がり、全身が炎に包まれたように熱い。

まるでアストラルという火にすべてを焼かれているような感覚だ。全てを燃やし尽くし、そこから何かを生み出そうとするかのような神の所業に私はただ神の断罪を受ける小さな人の子としてなすがまになる。

どのくらいの時間だったのか。一瞬とも何年ともいえないような時間の感覚の後、漸くアストラルの歌声が終わりを迎える。胸の上に置かれていた手をアストラルが離すと、それと同時に体中を蝕んでいた熱量が急速に失われていく。

私はそれに体力を奪われぐったりしてしまい、アストラルの腕の中にへたり込んでしまう。

「やはり、お前は……」

上からなぜか驚愕に震える男の声が聞こえた。何を驚いているのかわからないが、だが脱力感にそれ所ではない。

暫くアストラルの腕の中でぐったりしていると、私の額にアストラルの手が伸びて、べったりと汗で貼り付いた私の髪を梳いてくれた。「契約は終わった。これでお前は、私の一部となった。転生の輪から離れ、死んでも俺のものになるか、空気中に溶けて消えるかしか出来なくなった。天使どもが攫ったところで天つ国へはいけない。

天使がお前の魂に手を掛けた時点でお前の魂は消える。」

な、なんてことをするんだろう。この死神はと思ったが、私は疲れ果てすぎて、答えることも出来ない。まあ、死んだ後にまた、生まれ変わるなんて真っ平だからそれでいいけど。

「だが、安心しろ。その代償としてお前のことは生きている間は絶対に守ろう。お前の望みはすべて叶えよう。死んで俺のものとなった暁には神の一部として永劫のときとともに生きる。永久の伴侶としてお前の望みを叶えることを誓う。」

そう言つてアストラルはなぜか私の瞼の上に唇を落とした。

「……ちよつと待て。何だそれは。」

「……それってどういう意味？」

「……ん？なんだ契約の後に口を利けるのか。なかなか豪胆な花嫁だ。」

大の男でも三日は寝込むと言われている儀式なのに。」

アストラルはさらに私の額に唇を落とす。

「いや、花嫁とイカ…いや花嫁ってどういう意味ですか？ 一体。」

「そのままだ。相手の魂に自分のものだというしるしをつける。これは魔界の婚姻の儀だからな。すべての命は神の御名の下転生の輪に縛られている。その輪から相手を無理やりはずし、自分のものとする。その際その代償として相手の魂に自分の魂も縛られるから、その相手が死ねば、自分も死ぬことになる。つまりお前と俺は一蓮托生の関係になったわけだ。」

真つ白。と言うことはなんですか？ 私はアストラルのお嫁さんになっただけでスカイ？

「…未成年なので婚姻には親の同意が必要なのですが。こめかみにキスを落とされた状態でささやかれる。」

「人の法律など知るか。まあ、元々お前は私が取り込む魂の一部だ。魂を取り込んでしまえば、一心同体になる。それまではお前の魂の消滅は俺の消滅になるから危険と言えば危険だが、それでもいい。漸く手に入れたお前の魂は俺のものだ。誰にももう邪魔立てさせない。お前は俺の花嫁だ。」

「嫁って！ あほお！ ばか！ 同意してないって言ってるでしょ！ つか、さつきからなにしてるの！」

私は最後の力を振り絞ってアストラルの胸を押しやる。今にも唇に触れそうになっていたアストラルの顔が離れる。その顔が驚いたような表情を作る。

「なにつて。花嫁にするには当たり前の行為だろうが。」

「同意しておらんわ！」

「魂を喰われることには抵抗しなかったではないか。」

「それはそれ！ これはこれ！ …！ 結婚に合意したつもりはない！」

「同じことなのに。」

「魔界の常識と人の常識を一緒にするな！ …！ …！ つ！」

元々なくなっていた体力で一気に叫んだものだから、貧血になって

クラリと倒れそうになり、またもやアストラルの腕の中に沈む羽目になる。支えてくれるアストラルには少々申し訳ない気もしたが、なるだけ何もされないようにぜいぜいと息を上げながらもまっすぐにらみつけた。

「と、ともかく！魂をあんたと同化するのはどうでもいいけど、キスなんてことはしないで。」

私の言葉に、アストラルは心底不思議そうな顔をした。

「…そんなものなのか？…わかった。」

「え？」

あまりの物分りのよさに呆然とする。まさかこんなに簡単に了承してくれるとは。

「何を驚いている。」

「いや、まさかそんなにあっさりわかってくれるとは…。」

「何を言う。お前と俺は契約した。魔界で契約は絶対だ。俺はお前が嫌がることは絶対にしない。」

「そ、そういうものの？」

「そうだ。…さて、あまりここにいるのはよくない。そろそろ行くか？」

言われて、私はこの契約の目的を思い出した。

ぎらぎらと空から太陽が照りつける。光が強すぎてまるで世界は白と黒のモノクロのよう。

そこで真っ赤な姿の死神が光を遮るように、覆いかぶさるように微笑んだ。

「…さて。どこに行きたい？わが花嫁。」

第七羽 事故現場？

太陽がぎらぎらと照りつける。それは時間の止まった空間でも変わることはないようだ。

蒸し暑い空気が陽炎のように立ち上り地上を灼熱地獄に突き落とす。私たちは熱い地表を避けて、アストラルに抱えられたまま、目的地まで空を移動していた。

地上を見ると人も車もすべて時を止めて何一つ動いていない。

アストラルは私が死ぬとされた瞬間、時間を止めたらしい。

今も、あの駅のホームでは私が突き飛ばされたままの形で人が止まっている。

アストラルが言うには、あのまま私が死んでもそのまま魂が回収できれば良かったのだが、身体がばらばらになるような死に方をする、魂も身体とともに細切れになるため、とても回収が面倒になってしまうらしい。

天使なら海戦術で集めてしまえるが、一人であるアストラルではそうはいかない。

アストラルが言うには死ぬ直前の魂にその守護者であり回収人である天使がそばにいないことは大変稀なことらしい。天使は死ぬをわかっている人間のそばにいて死んだ瞬間、すぐさま悪魔や死神にその魂を取られないように天界に送ってしまうため、死神であるアストラルが魂を手でできる機会は本当に少ないと言うことだ。

だからそれを横取りできる瞬間は見逃さないようにしていたら、たまたま私の死ぬ現場に居合わせたとのこと。

「おそらくお前の守護天使はあの能天使だったのだろうな。」

「え？あの人か？」

アストラルの前にあっさり敗れてしまった天使のことを思い出す。

「でもあの人相手なら、アストラル、別に私の魂を簡単に奪えたんじゃない。」

「話を聞いている。天使は死んだ後の魂を天界に間をおかずに昇天させる。いくら俺の力が強くてもその常に付き纏って、天に送る機会をずっと待っている天使の早さには敵わない。一度神の手に委ねられたものを横取りすることも不可能だ。」

だから、死ぬ瞬間に天使が付いてない魂は本当に貴重なのだ話す。「何であの天使が死ぬ瞬間にお前のそばにいなかったのかわからないがな。」

なんか、今思えばどこかドン臭そうな人だったしな。どこかよそ見していて、私の死ぬ瞬間を見失っていたなんてことはなんとなく考えられる気がする。

「まあ、他の男の話などどうでもいい。…さて、付いたぞ。」

そう言っアストラルが揺るやかに降下を始める。

アストラルに抱えられ空を飛んで向かったのはとある一つの交差点だ。

何の変哲もない道路。四つ角の一つに出っ張って立てられている電柱が一つある。

「・・・ここか？」

アストラルが聞く声が聞こえたので私は頷く。その角に一本だけある電柱に近寄ると、途中で見つけて摘んできた雑草の花をその電柱の根元にばら撒いた。

モノクロの花だ。黒いアスファルトの地表に白と緑のコントラストをつける。

それを何の感慨もなく見つめる。

「ねえ。アストラル。」

「なんだ？」

「ここに誰がいる？」

「は？」

死神でも驚くことがあるとはある意味驚きだ。だが驚きの声を上げたまま、怪訝そうに死神はこちら伺っている。

その視線は赤い。その瞳は紅玉ルビーのようにきらきらと輝いていつま

でも見ていたいような魅力に満ちている。

だが、いつまでも見詰め合っている場合でもない。その視線に特に怯むこともなくまっすぐ見返した。

「ここに誰かいるのかと思って。幽霊とか。」

「・・・会いたい人でもいるのか。」

「・・・さあ。」

「さあつて。会いたいからそいつが死んだ場所に來たんじゃないのか？」

この死神にはこのことを話してはいない。

だが、まあ交差点の電柱に花を置くんてことを言えば、ここで人が死んだというのは丸わかりか。

視線を落として電柱の下に散った花を見つめた。

「...どうなんだろうね。会いたいといえば会いたいかもしれないけど。」

「けど？」

「どうでもいいといえばどうでもいい。」

私の言葉にアストラルはなんともいえない表情になって黙り込んだ。会いたい気持ちと今更あつてどうなるかという気持ち。

本当に、どちらなのか自分でわからないのだ。ただ世界のこと、今を生きることがまるで薄い膜を通しているみたいにいつも希薄で曖昧だ。

私は地面に散った花卉の一つを拾った。白い花だ。

空き地の藪の中なんかどこにでも咲いているような雑草の白い花。だが彼はこの花が一番好きだといっていた。強くてたくましいから。踏みつけられても又咲き誇る気高い花だと。

それを言った人はもう今はいない。知らない間に死んでいなくなってしまった。

「ここで死んだ人はね。私を誘拐した人だったんだ。」

じつと電柱の根元の花を見つめながら、淡々と話す。

揺れる心はない。ただの昔話。

「もう何年も前のことだけど、私、男の人に身代金を目当てに誘拐されたのよ。」

誘拐犯の名は原口という。後に新聞で出ていたのを見て初めて名前を知った。

その記事の切り抜き今でも持っている。私はそつと制服の胸元に手を遣った。もう何度も見返して、ぼろぼろになっっているその新聞記事の写真は随分と印象の違う顔だと言うことだけは覚えている。とてもよく笑う男だった。

誘拐を企ててしまうような悪い人だったけれども、私の過去において唯一家族だったと言える人だった。

「私はその人のことおじちゃんと呼んでいた。一月位かな。私を養って私と一緒に暮らした。いろいろなところに連れて行ってくれました。そんな経験家でしたことがなかったから、いつも新鮮でおじちゃんとの暮らしは楽しかった。」

それに比べて実際の親はどうだったのか。
今でも覚えている範囲で親にどこかに連れて行ってもらった記憶はない。

いつも遊びに行くときも一人。近くの公園がせいぜいで、誰かに遠くに連れて行ってもらい遊んだ記憶はおじちゃんのものしかない。
「私の親はね娘が誘拐されたって電話をもらっても一円も出さない親だったのよ。」

昔から子供に関心のない親だった。だから、いつの間にか娘が家からいなくなっても、帰ってこなくても電話があるまで心配の一つもしなかっただろう。電話があっても心配しなかっただろう。

「電話口で男の人に『家には娘はいません』って言ったらしいよ。それにその後には搜索願もださなかったって。」

別にそれはどうでもいいことだった。だってそんなことはわかっていたから。攫われるときも誘拐犯に何度も聞いた。私でいいのかと。「それでおじちゃんは随分と私を気の毒がってくれてね。一緒に生きていこうって言うてくれた。」

本当はとても気のいい、気の小さい人だった。

お金がなくてつい出来心で誘拐なんかして、でも掴んだのは親の関心の薄い役立たずの子供で。結局お荷物を背負い込んだだけだった。でも行くところも帰るところもない私を家においてくれて、ご飯を食べさせてくれて、娘としていろんなところへ連れて行ってくれた。私はまだ幼くてその状況がどんなものかわかっていなかったけど、多分自分ひとりでも生きていくことが大変で誘拐しようと思いつめた人がもう一人抱えこむなんてとても大変なことではなかったかと思う。だけど、誘拐犯の男の人は決して、私を放りだそうとはしなかった。何度か私に家に戻るかと聞いてくれたことすらあったが、その度に私は首を横に振った。

あの冷たい家には何でもあった。それなりの中流家庭的ではあったが、一人部屋ももらえたし、欲しいものは何でも手に入った。だが、家族団らんの記憶は今も昔も何一つなかった。それに比べれば、おじちゃんとの暮らしは何もなくて、時には食べるものがなくてひもじい思いもしたが、心は満たされていたように思う。

だが、そのおじちゃんとの同居生活は一月ほど続いて、唐突に終わりを告げた。

ある日、おじちゃんが私を乗せたバイクで事故を起して亡くなったからだ。

夏の暑い昼だった。私とおじちゃん是一緒に出かけた。前日に風邪を引いていたおじちゃんだったけど、ずっと前から約束していた植物園だからと、無理にでも連れて行ってくれた。バイクに乗る前に飲んでいた風邪薬に睡眠効果があつて、それで朦朧としたおじちゃんがハンドルを誤っての事故だったらしい。

それからのことはあまり覚えていない。私が気付くとそこは白い病院の一室だった。

速度の出たバイクが電柱にぶつかった場合かなりの確立で乗員は死んでしまうらしいのだが、奇跡的に私は軽症だった。見つかったとき私はおじちゃんに抱きかかえられるように倒れていたと言っから

おそらくおじちゃんが最後の最後で私を庇ってくれたのだろう。だが、私はいつそ庇われず、おじちゃんと一緒に死ねればよかったとベツトの中で思った。

その事故で誘拐が発覚して親元に私は戻された。それから本当に思い出したくもない日々だった。

親は子供が誘拐されても行方不明の届けを出さなかったことをマスコミに書き立てられ、そのことで私を詰った。

父は怒鳴り散らした。

『お前のせいで私たちがどんな迷惑をこうむったか。』
母は詰りながら涙を流した。

『お前さえ、いなければ。産むんじゃなかった!』

そして二人は一緒に言ったのだ。

『何でお前は生きているんだ?』

なんだかその言葉を聞いていたら、ああ本当に生きていることの意味が本気でわからなくなった。

「一度ね。本当に自殺しようと考えて手首を傷つけたことはあったんだけど、痛くてやめちゃった。」

おじちゃんの言葉があつたから。

私が料理をしようとして手を切ったとき絆創膏を貼ってくれながら「痛くなるようなことは無理にしなくていいから。」といってくれていた。

私はそれで無理に死ぬことを諦めた。

きつとあの時、私の世界は色をなくした。いや、本当に色と言うものがあつたのだろうか。最早どんなものが色と呼べるものだったのか思い出すことも出来ない。目では認識できる。だが心で感じることが出来ない。いつも心は空虚だ。

無色透明。希薄な空気。息苦しくて窒息しそうだ。

私は水の中でもがくように生きていた。流れに流され、感じることもなく、楽しいと言われうことも苦しいといえることも何もなく。だから楽しいことというものがどういうことなのかわからなかった。

苦しいことすら輪からなった。だからいつも人の真似をするようになった。

楽しいのだという顔を相手がしたら同じように楽しい表情を作った。苦しいといったら苦しいのだと同調して答えた。

だからいつも誰かに自分の意見を聞かれたら、相手の意見に合わせて。反発するのも面倒だったし、どう反応していいのかわからなかった。何もかもどうでも良かったから。

自分の考えに沈む私を、アストラルはじつと何も言わずに見つめていた。

第七羽 事故現場？（後書き）

アップする順番間違えた（汗
すみません。

第八羽 墓参り？

「墓には行かないのか？」

それまで黙っていたアストラルが不意にそんなことを言って、一瞬理解が追いつかない。

「お墓？」

死神からそんな言葉が出るとは。

「この国の人間は誰かを偲ぶときには墓前に手を合わすのが、慣例だろう。」

随分、日本の慣習について知っている死神だと思う。顔立ちが欧風なので知識もそうだと侮りすぎていたらしい。

「普通、死んだ人間に会いたいときは、そいつの身体の一部が眠る土地に行くものじゃないのか？」

真っ黒な視線が私をまっすぐ貫く。私は目を伏せた。

「お墓の場所がわからないから。」

「わからない？」

「元々私とおじちゃんとは誘拐犯とその被害者と言う関係なのよ。事件が発覚してそれ以降事件に関わることは禁止されたわ。新聞記事を見ることもワイドショーを見ることも禁止された。おじちゃんその後のことなど知りようもない。」

今もっている新聞記事だとて、必死で親の目を盗んで手に入れたものだ。それがなければおじちゃんの本名を知ること出来なかった。

「…もし、墓の場所がわかったとしてお前は行きたいか？」

私はその質問の意味をとりあぐねた。おじちゃんの眠る墓。行きたいかと問われれば。

「行きたい。…けど。」

場所がわからない。そう言う前に私はアストラルに抱え込まれた。

「よし、じゃあ行くか。」

「え？うわっ!？」

突然強い風が吹き付けたかと思うと瞬きする間に、景色が変わった。風が、吹き抜けて髪を流す。

景色が変わると同時に音が戻る。草が風に流される音が聞こえ蝉の大合唱が聞こえた。

アストラルが時間の拘束を解いたのか。

そこは随分と遠い山奥のような場所だった。

崖の上らしく少し突き出た場所。眼下には緩やかな山並みが広がり、一面には赤や黄色や青い花が咲き乱れる。夢のように綺麗な場所だ。その崖の突端に誰かがいた。小さな石組みの前にしゃがみこんでいる。

その後姿にどきりとした。随分昔に見た後姿とダブったからだ。そのときよりずっと小さいけど、雰囲気がよく似ている。

その人影が振り向く。ぎくりとした。

「あら」

その人は後ろにひとがいるとは思わなかったのか、驚いたような声を出したが、すぐに笑顔になった。

「こんにちは。」

笑う目じり。女の人だ。知る人は男の人。別人であることに安心すると同時にどうしようもない寂しさが胸をよぎった。

「あ、こんにちは。」

「珍しい。ここはあまり地元民しか来ないのですけど。こんなところまでどうしたんですか？」

聞かれて口ごもる。ここがどこかわからないし、なおかつ死神につれてこられましたなんていえない。そう言えば、アストラルはどこだろう。

周囲を見回すが、あの特徴的な赤い姿は見えない。

「もしかして迷われましたか？」

「え、あ。…はい。」

一番無難な答えかと思って、頷いておく。

「まあ、この麓も大分観光地化が進んだから迷い込んでしまったん

でしょう。ならば、もう少し待ってもらえますか。一緒に町まで降りましょうか。案内しましょう。」

「え？あ、お願いします。」

親切な申し出に、だが町に下りたところでどこかわからないのでどうしようもないのだけれど。

「いえ、困ったときはお互い様ですから。」

その言葉に不意に誰かの声が重なる。

『気にするな。困ったときはお互い様だ。』

笑う顔。懐かしい温かい笑顔。その顔が目の前 of 女性とダブって見えた。

「あ、あらあら？どうしました？」

女性がびっくりしたような顔をして慌てたようにポケットからハンカチを取り出し差し出してきた。

「目にごみでも入りました？」

そう言われて、初めて自分が泣いたということが、わかった。胸が苦しくて痛い。懐かしい影に目頭の奥が熱くて涙が止まらなかった。

もうずっと忘れてた。思い出すとつらいから。

それでも毎年命日になると彼が好きだった花だけを持って彼が死んだ場所まで言って供えた。もう誰もあそこに花を供える人はいない。あの場所で死んだ人間のことなど知らない。

でも自分だけは覚えていようと思っていた。あの命日にだけ。

それ以外は勤めて忘れようとしていた。そうでなければつらすぎた。あの狭い部屋の空気と今の空気の暖かさが違いすぎて心が折れそうだった。

だが、どうしてだろう。この目の前にいる女性はどこなくあの日にもらった暖かさを備えている。一緒にいるとどうしようもなく思っ

てい出してしまふ。涙が止まらない私に、女性はなにも言わずに背中をさすってくれた。明らかにごみが入ったなんて泣き方じゃなかったのに何も言わずに

そばにいてくれた。

「…ごめんなさい。突然。」

どれくらい経ったのか。漸く収まった涙に跋が悪くて俯いていると、女性はなんでもないことのように微笑んだ気配がした。

「…なに、時々ありますよ。気にしないで。」

につこり笑うその暖かさにさらに胸を締め付けられてなきそうになったので、慌てて話を変えようと話を振った。

「あ、あの。ここで何をされていたんですか？」

「え？」

「こんな花以外なにもなさそうな場所にお一人でおられるから…て、あ。」

そこまで言っただけ詮索好きな人間みたいなのを言っているのか気付いて、恥ずかしくなる。別にこの女性がこんな場所で何をしても自分には関係ないことではないか。それに人には聞かれたくないこともある。

女性だって、突然現れて突然泣き出した私のことを何一つ聞いたりしなかった。

「あ、ごめんなさい。言いたくなければいいです。不躰な質問をしてしまつてすみません。」

慌てて謝る私に、だが女性は笑って見せた。

「いえ、別に隠すようなことではないからいいんですよ。」

女性はころころと笑う。それから崖の先の小さな石の集まりに指差しながら少し寂しそくに微笑んだ。

「あそこ。この崖の先は私の弟の墓なんですよ。」

「…弟さんの？」

胸が早鐘のようになる。

「ええ、訳があつて先祖代々の墓には入れられずこんなところに埋葬することになってしまつていて。今日がその命日なものでね。」

その横顔が知っている人に似ていた。今日が命日だと言う弟。あの石の下に眠るのは。

「その人って…。」

思わず聞きそうになるが、口を噤む。

一体何を聞いたらいいのか。おそらくおじちゃんが先祖の墓に入れなかったのは私の事件があったせいだ。あの事件で誘拐犯として新聞に載ったおじちゃんにこの人の親族は一緒に墓に入れるのを拒んだのだろう。そしてこんな人の来ない場所に埋葬されてしまった。その原因になった私が一体何を聞けるというのだろう。どんな顔をしておじちゃんの親族に会えばいいのかわからない。

「ねえ、あなた。ここであったのも何かの縁でしょう。」

「え？」

「町では弟のことは禁忌みたいに言われて誰にも話すことが出来ないの。でも命日って普通は故人のことを思い出す日だわ。良ければ弟のことを聞いてくれないかしら。」

女性の言葉に私はつばを飲み込んだ。

「…聞かせて。くれるんですか？」

「貴方さえよければ。」

女性が微笑む。

女性はきつと知らない。私が彼を死に追いやったこと。

おじちゃんは私と一緒にいるためにはお金が足りないと早朝のアルバイトを始めた。でも、それまでもおじちゃんはたくさんの仕事を掛け持ちしていて疲れているのにさらに仕事を増やした。仕事がない日には私の相手を一日中してくれて疲れていた。休む間のない日々。そんな中で起こったバイク事故。

あの日植物園に行こうなんて言わなければ、疲れて、風邪を引いて風邪薬なんて飲まなければおじちゃんは今も生きていただろう。

私が殺したようなものだ。私が素直に家に帰っていれば。私が攫われたりしなければ、こんな寂しい崖の上に一人眠ることもなかった。死ぬこともなかった。

「わ、私は…。」

ああ、なんと言ったらよいのだろう。懺悔もなにもない。

私はずっと加害者だった。私はおじちゃんを死に追いやった殺人者だ。

世界はずっとモノクロだった。だって、鮮やかな世界に生きる資格なんて私にないから。

私には喜びも楽しさも感じてはいけない。

何も言えずに黙り込む私に女の人、微笑みながら、だが話を始めた。

「…弟はね。昔から要領の悪い子でね。人が良くて気が弱くて、そのくせ厄介ごとをいつも背負い込んでいつも苦労しているような子でした。でも時々大胆なときもあって、それでよく貧乏くじを引く羽目になっていたんです。」

それは知っている。だって、お人よしで誘拐した子供が親から愛情をもたれてないとして、その上でその子の世話を背負い込むような人だ。

「この町でもずっと要領が悪くて、皆にいじめられてね。みんなを見返すんだって言って東京に出て、そしてそれっきり。出て行くときはお嫁さんでも連れて帰ってきてくれればと気軽に見送ったんですけど、帰ってきたと思ったら死んでしまっていてね。」

寂しそうな顔に胸が締め付けられる。

「…おじ…、弟さんは幸せなときはあったんでしょうか。」

「さあ、どうでしょうね？…でも。死ぬ直前にもらった電話では幸せそうでしたよ。」

「え？」

「聞いたこともない声で、誰かに頼られて一緒に生きることがこれほど幸せなことだとは思わなかったと嬉々として話していました。」

幸せだった。その言葉に呆然とする。

「…嘘。」

「…嘘じゃありませんよ。随分苦労したみたいで、貧乏していたらしいけど、声だけは明るくてね。それだけでああ、幸せなんだなっで。」

「…そんなの！嘘！」

強く否定すると流石は女性が驚いたようにこちらを見た。

だが一度溢れた感情は止められなかった。

「そんなわけないじゃない！こんな場所で、一人で眠って。真夏に風邪を引くくらい働きづめに疲れて、死んで。一体その生活のどこに嬉しさや幸せがあるって言うの！？」

記憶の中でおじちゃんはいつも笑っていた。

「でも弟の死に顔は安らかでしたよ。」

「っ！……。」

女性が何もかも見透かすような透明な視線を向ける。

「ねえ、この崖の上、綺麗でしょう？」

「え？」

「元々は何もないただの野原だったんです。何もない一面緑だけの味気ない。だけど、弟の墓を立てた後辺りからぽつぽつ花が咲き始めてね。」

今ではこの有様、と可笑しそう女性が笑う。

「最後の電話でね。弟が言ったんです。都会には碌な花がなくてその子に見せる種類がなくて残念だって言っていました。都会は色がなくてつまらないって。だから、今度植物園に連れて行くんだって。でも本当は故郷の花を見せてやりたいって言っていました。」

この地に咲く色とりどりの花と一緒に暮らしている子に見せてあげたいって。きっと喜んでくれるって嬉しそうに言っていました。」

女性が崖に向かって視線を投げる。私はその背中を呆然と見つめた。「きっとこれは弟の仕業なんだろうね。弟がその子に見せたいと思っていた色とりどりの鮮やかな世界。」

私は崖の上を見渡した。

それは色鮮やかな花の乱舞。赤や青、ピンクに黄色。それらが鮮やかな色を放ち緑の中に咲き誇る。夏の強い白い光にも負けない、世界は色に満ちている。

『なあ、マア坊。』

おじちゃんの声が耳に蘇る。

『よく見る。よく感じる。世界はまっすぐお前の前に広がっている。感じる、色を。感じる、音を。ほら。』

ああ、世界はこんなにも鮮やかに綺麗な場所だ。

人は容易く目の前のものを見失う。慣れという感覚に自分の立ち位置さえ見失う。

確かにそこに存在するのに。いつでもいつのときでもそこにあるのにそれを見ようとしない。当たり前になると自分の視界さえも疑って、そこにはないものにする。

『でもそれじゃあ、つまらないだろう。』

おじちゃん的笑顔が浮かぶ。少し疲れてやつれていたけど、それでも一杯明るくて幸せな笑顔だった。

つまらない人生を送るな。

おじちゃんは確かに私に言った。

『不幸になるために生まれた人間なんてない。』

努力を怠るな。幸せになる努力。

世界を感じて、一杯取り込んで、たくさん笑って。

『幸せになれ。』

暖かな笑顔。ああ、そうだ。おじちゃんは私の前でずっと笑顔だった。

不意に視界が歪む。私はその場にしゃがみこんだ。

「弟は幸せだったわ。」

女性が私の背中を撫でる。その仕草は優しい。

第九羽 襲撃？

「…もういい。」

「…え？」

「もういい。わかったから。…アストラル。」

名前を呼ぶと女の人は一ひどく驚いたような顔をしたが、やがてその姿がぶれ、赤尽くめの死神の姿をとった。

「…気付いていたのか。」

「…当たり前だよ。そんなに都合よくあんな話してくれる人いるわけないじゃん。」

「まあ、そうだが。…だが、話は本当だぞ。」

「どこから？」

「すべて。あの墓の中の男が、姉に話した最後の会話も、この崖に花が咲き乱れ始めたのも本当だ。」

「…ねえ。アストラル。おじちゃんは本当に幸せだった？」

「…人の心は本当の意味で理解できない。だが…。」

アストラルが崖の花畑に視線を投げた。

「こんな花畑の中に眠る人間が不幸だとは考えたくないな。」

「…そうだね。」

色とりどりの花。咲き乱れる花卉。全てが夢のように美しい。ここがたとえ一人で眠る場所だとしても、幸せだと思いたい。

「…変な死神だね。アストラル。」

私は隣で花畑を見守る死神を見上げた。

「…そうか？」

「…そうだよ。死神がこんな風な演出してくれるなんて。」

「…どうも死神に偏見があるみたいだな。死神は元々、死した魂を譲り受ける代わりに、その魂の悔恨の除去も生業としている。悔恨に満ちた魂は死神にとってもあまり良質なものではないからな。だから、魂が安らかになるような演出もまた仕事の一つなんだぞ。」

「…そうなの？」

「まあ、それをせずに問答無用で奪い取るような悪食な輩はいるから勘違いされても仕方がないのかもしれないが。その点私は良心的な死神だ。」

「良心的って。」

「まあ、ここまでしてやったのはお前が初めてだが…っ！」

突然、アストラルが私を抱えると横に大きく飛びのいた。

次の瞬間、私たちのいた場所が大きな爆発音とともに吹き飛んだ。

「なっ！」

爆風に花が吹き飛ばされるのを見て、私はアストラルの身体から抜け出そうとする。

「ばか！行くな！」

「だって！おじちゃんの花が！」

「状況を見る！」

「っ！？」

第十羽 ドミニオンズ？

目の前を埋め尽くすのは純白の羽。一体いくらいると言うのか。何十もの天使が空を覆いつくし、こちらにすべての視線を向けている。

その姿は最初に見た天使とは異なり、西洋の甲冑のようなものを着て、その手には白銀の盾と槍を帯びている。

一体いつの間に囲まれていたのだろう。

その大群の先頭に立つ一人のひとときわ意匠の凝ったデザインの甲冑を着込んだ女天使が口を開いた。

「死神アストラス。永久の神への反逆者よ。漸く見つけたぞ。覚悟しろ。」

アストラルの顔を見ると、珍しく焦ったような色が伺えた。

「…主天使だドミニオンズと？いきなりそのクラスがこの大群。」

「ね、ねえ。主天使ドミニオンズって一体？」

「最初に襲った奴が能天使。あいつの二つ上のクラス。中級では最上級に位置する天使だ。」

「そ、そんな！でも、アストラル。貴方って強いんでしょ？あの天使が百人束になったって勝てるって…。」

「まあ、能天使くらいならな。だが主天使クラスになると束でかかられてはそうは行かない。」

「そんな。…どうなるの？」

「俺の力が万全ならあいつらがどんなに来ても、勝つ自信はある。」

「だが。」

アストラルの顔が私に向く。その視線がどことなく憂いを帯びていて不安に胸がどきどきした。

「…だけど？もしかして、私の魂を取り込めば何とかなっちゃたりする？」

アストラルは肯定も否定もせず黙り込んだ。だが、その姿こそが、

肯定を示していた。

「それは…。」

こちらを見つめたまま、アストラルの手が私の肩にかかる。

「っ！…や！」

アストラルの手が肩に触れた瞬間、私は恐怖を感じて思わずその手を払いのけた。

感覚としてはまるで肉食獣に触れられた被捕食者のような。

私の反応にアストラルが驚いたような顔をする。

魂を喰われることを肯定していたはずなのに。私は。

（今更生きたいって思ってる。）

おじちゃんの言葉。色鮮やかな世界をもっと味わいたい。

自分の両肩を抱くようにして震えた。

なんて自分勝手な反応だ。そんなことは許されない。

既に私はいわば死んでいる人間だ。あの駅での事故で死んでいたはずの身だ。

それが、アストラルによって時間を止められて、免れただけ。

きつとアストラルはこの大群を退けるために、私の魂を取り込むのだろう。

だってそう言う約束だった。私はおじちゃんの墓参りにだけ行かせてくれるようにと頼んだ。その後、彼に魂を上げる契約をした。

私は自分を自分で抱きしめながら、そつとアストラルの顔をうかがった。と。

「っ！？」

目の前の死神の表情に私は言葉もなく硬直する。

アストラルは私の反応になぜか傷ついたような顔をしていた。

（…なんで。）

こんな表情をするのだろう。彼にとって私は力を取り戻すために取り込む一万人目の魂でしかなかったはずなのに。

契約の力だろうか。伴侶の契約。

そう言えば、あの契約を交わした直後から、アストラルは私に優し

くなつた気がするけど。

アストラルは払われた手を暫く見つめた後、その手を握り締め、私から視線を外して、天使の大群を見上げた。

第十一羽 能天使再び？

「いや、大丈夫だ。今のままでも…。」

百人はいる大群を恐れることなく睨みつけるアストラルに、先頭の女天使が馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「ほお、この大群を見ても恐れをなして逃げぬとはよほど腕に自信があるのか、バカなのか。」

大群の先頭に立つ甲冑を着た女天使が槍を構える。

「ふん！いかに主天使といっても高々中級三隊のトップということじゃないか。そんな相手に俺の本気を出したとあつては名折れなんぞでな。」

「っ！貴様…。おぞましき死神、神に抵抗する禍々しき墮天の使徒ごときが、我らを侮辱するか！その言葉、万死に値するぞ！」

天使というのは逆上しやすいのだろうか。あっさりアストラルの挑発に乗って、槍を構えて突進しようとする。だが、その二人の間に突然誰かが、割り込んだ。

「待つてください！」

金系の神に純白の羽。空を埋め尽くす天使たちとは違い、その身に甲冑はなく柔らかな白い服だけを着ている。その姿に見覚えがあった。

それは最初にアストラルに戦いを仕掛けた天使だ。彼がこの大群を引き連れてきたのか。

私はそれに気付いて、彼を助けたことを後悔した。

これほどの大群が来るとは思いもしなかった。しかもアストラルが不安に狩られるほどの大群が。

だが、一体なぜ彼はこちらとあちらの間に入って、二人の戦いを止めようとしているのかわからない。不安に戦局を見守っていると、その能天使は女天使に食って掛かった。

「ちよっ！話が違いますよ！」

すごい剣幕で女天使に詰め寄る能天使。だが、女天使は不快なものでも見たかのように眉をひそめた。

「なんだ、お前。ここまで案内ご苦労だった。だが、もう用はない。死神に魂を横取りされるような失態の処罰は追って知らせる。天界に先に戻っている。あの死神はこちらで処理する。」

「そうじゃなくて！あの人間はちゃんと回収して神の御許にきちんと送り届けるって約束だったじゃないですか！なんで一緒にいる時にあんな大技を仕掛けるんです！？」

どうも様子がおかしいことに気付く。あの能天使、もしかして私の心配をしてくれているのだろうか。どうして。

「…お前のその目は節穴か？あの人間の魂は既に汚されている。手遅れだ。」

「え？」

「だが、まだ幸いなことにあの死神とは同化していない。と言うことはおそらく契約だけだ。死神を消せば、どっちにしろ空气中に消えることになる。諦めろ。」

「で、でも！」

なおも言い募る能天使に女天使は怒鳴った。

「くだいわ！…まったくお前の失態で神の尊い魂が一つ消えることになったのだぞ。その罪をせいぜい悔い改めるのだな。…おい、連れて行け！」

「え？…わっ！」

見知った能天使は女天使の指示で両脇を他の天使に抱えられ後方に下げられていく。

…ちよつとこの戦局をひっくり返してくれることを期待したのだが、彼にその期待は大きすぎたらしい。

「…さて、待たせたな。」

能天使を下がらせた女天使は改めてアストラルに向かい合う。

「茶番は終わりか？」

アストラルは余裕を見せるためなのか、にやりとそれを笑って見せ

た。

だが、今度の挑発に女天使は鼻を鳴らしただけで乗ってこなかった。
「ふん。抜かせ！やせ我慢め。いかにお前の力が強大だろうと、この数の主天使を相手にするのはきつkarou。」

アストラルの目が険しいものを帯びる。それに満足そうに女天使は笑った。

第十二羽 戦闘？

「天の反逆者！死神アストラル！今こそ神の報いを受けるが良い。」
女天使の掛け声とともに大量の天使がアストラル目掛けて殺到してくる。

「わっ！」

「く！」

直撃する寸前、私を抱えかわすアストラル。だが爆風が吹きつけ、少し飛ばされ後方に着地する。

着地するなり私を地面に置くと同時に何か地面に書き付ける。

素早くそして正確に一メートルほどの真円が書かれ、その中に私は置かれる。

「…いいか？ここを動くな？」

「え？あ！アストラル後ろ！」

「っち！」

天使たちの刃がアストラルの背後から迫り、アストラルは横に飛びのいた。だが、そこにはまだ私がいるわけで。

「ぎゃあ！」

天使の槍が私の頭上に迫る。が、何か透明な壁にでも当たったように、その切っ先が跳ね返された。

「え？」

その後、天使たちの攻撃が私に向かおうとするが、その度に私に届く前に高い音を立てて跳ね返される。

「っちい！結界か！？小ざかしい！」

女天使の憎憎しげな顔が間近に見えたが、アストラルが何かしたのだろう。地面に書かれた新円の範囲内に天使たちは入れず、私に手を掛けることは出来ない。

私はへたり込んだ。

「どこを見ている？お前達の相手はこちらだろう？」

アストラルの声が聞こえたかと思うと、私を取り囲む天使の後方で悲鳴が上がる。その声とともに天使たちの生垣が割れ、巨大な黒い鎌を持ったアストラルの姿が見えた。

まさに死神の鎌。下手をすれば自分すらも巻き込みそうなほど巨大な刃が、休むことなく翻り、一度に何対もの天使をなぎ倒す。

「ほらほら！どこを見ている。よそ見できるほどお前達は強くはないだろう！」

アストラルが後方から次々と天使たちを血祭りに挙げていく。私はその光景を呆然と見ていた。

私のすぐ隣にいた女天使が逆上したように吼えた。

「貴様あ！よくも我が同胞を！皆！かかれ！悪魔の使徒を滅ぼせ。」

女天使の声とともに天使たちが一斉にアストラルに向かう。だがその大群の切っ先はすべて死神の鎌に流され、的確に振られるその刃に吹き飛ばされる。

「どうしたあ！所詮大群とはいえ、烏合の衆でしかないか？」

左から甲冑の天使が鋭い突きを繰り出すが、アストラルはまるで舞のような優雅な動きでそれを紙一重で交わし、返す刀と言うのか返す鎌の刃で天使を甲冑ごと切り割く。だがそれで吹き飛ばした相手の後ろから又新たな天使が現れ、アストラルに向かう。それを鎌の柄で突いて飛ばす。

アストラルの動きは天使たちのような大降りで無駄の多い動きとは違い、優雅で極小の動きで全てを処理している。力の差は歴然だ。

それは素人の私でもわかる。だが。

「覚悟！」

「っ！ち！」

左からの攻撃に気を取られたアストラルの右から剣の風が襲い、よけたが皮一枚持っていかれ、アストラルの綺麗な顔に一筋の赤い筋が浮かぶ。その剣をアストラルは素手で掴むとその勢いで、剣を持ったままの天使を放り投げた。だが、その後にも天使たちは殺到し、アストラルに休む間もない。

一人ひとりの天使たちはおそらくアストラルにとってそれほど脅威のある相手ではないだろう。だが、圧倒的に数が違う。どんなにアストラルが倒しても無尽蔵なくらいに天使たちは次々とアストラルに群がり攻撃を仕掛けてくる。見ている間にアストラルの身体につき傷は軽いが、確実に増えていった。

私はその戦いをはらはらしながら見守っていたが、あることに気付いた。

（…！？おじちゃんの花が！）

大量の天使たちとアストラルの戦いの中であれほど咲き誇っていた花が踏みにじられ無残な有様になっていた。

最早一本も無事なものがないのではないかと言うほど荒らされた地面に悲しさが込み上げる。勿論そんなことを言っている場合ではないと思う。アストラルが殺されそうになっているのだ。だが、悲しいものは悲しい。

そのとき、私は気がついた。踏みにじられた花たちの間に一本だけ無事な花がある。鮮やかな赤い花。私がおじちゃんの死んだ場所では撒いた花と色が違うだが同じ種類の花だ。おじちゃんが好きだった。だが、あのままあの場においていたらいつ踏み潰されるかわからない。いくら強くてもあれほどの人の足に踏まれれば、立ち直れない。

だが、今この結界の中から出れば、まずいことくらいはいくらなんでも私にだってわかる。だが、ある天使の足が花にかすめ花の一部が舞い散るのを見て、いても経っても居られず、思わず飛び出してしまう。

（おじちゃんの花！）

たどり着くと同時に、花を土ごと引っこ抜き、そのまま胸に抱える。花を確保すると同時に結界に再び戻ろうと走り出そうとしたときに、不意に目の前に影が差した。

見上げると既に天使の一人が私の頭上に剣を翳し振り下ろそうとするのが見えた。こんな状況に不慣れな私がよけきれぬ距離ではな

った。
私は思わず花を抱えて目を閉じてしまった。

第十三羽 墮天？

「危ない！」

突然、横から来た衝撃に突き飛ばされ私は花ごと横に転がった。

「わっ！あ……」

突然のことに驚いたが、すぐに体制を立て直そうと起き上がり、目を開けたとき飛び込んできた光景に驚いた。さっきまで花があり私がいいた空間に突き刺さった槍。深々と突き刺さった光景にあのままあそこにいたら確実に自分の串刺し死体がそこに転がる羽目になったのがありありと想像出来てぞっとする。その横で私を突き飛ばしたと思しき天使が転がっている。その顔は。

「貴方……」

先ほどよりなぜか引つかき傷だらけでぼろい格好をしているが確かにあの能天使だった。

「……。無事ですか？」

顔を顰めながら起き上がる能天使がこちらを見ながら聞く。が敵だと思っていた相手に助けられて混乱する。

「……なんで？」

困惑するこちらに能天使は少し情けない顔で笑った。

「だって、貴方、僕を助けてくれたでしょう？」

「え？」

それは、あの時私がアストラルの攻撃を逸らしたときのことを言っているのか？でもあれは、別にこの天使を助けたかったわけじゃない、ただ自分のせいで誰かが死ぬのが見たくなかったただけだ。自己満足だけの行為だ。

「でも、あれは別に貴方のためにやったわけじゃ……」

能天使の姿を見て、呆然とする。確か彼は無理やりあの時天界に連れて行かれたはずだ。なのになぜか傷だらけになってここにいる。もしかしてあの連れ去ろうとした天使を振り切ってここにきたとい

うのか。あんな自己満足の行為のために。

「それでも、僕は救われたんです。だから…っ！」

再び振るわれた横合いから槍の突きに能天使が身を挺して守ってくれた。だが。

「くっ！」

槍が深々と能天使の肩に直撃する。貫通して噴出す血に私は顔を青ざめさせた。

「おのれ！なぜ邪魔する。お前、悪魔の使徒に魅入られたか？」

怒りに鬼のような形相で槍の柄を握る女天使が能天使に怒鳴る。

それに能天使は弱弱しく首を振る。

「そんなではありません。」

「ならばなぜ？」

「彼女は僕をあゝの死神の攻撃から救ってくれました。」

「だから、なんだ。この娘が死神のものとなり、最早天の慈悲の範疇外にいる。早々に楽にしてやるほうがその娘のためだ！」

怪訝そうに眉を顰める女天使に、痛みに顔を顰めながら、能天使が、物分りの悪い生徒に話すような口調で笑って見せた。

「天使は決して受けた恩を忘れない。彼女はどんなものになろうと僕の命の恩人なんです。決して消せたりさせない。」

そう言いきると能天使は自分の肩に突き刺さったままの槍を反対側の腕で掴み、勢い槍を抜いて、力任せに引っ張り、油断しきった女天使の手から奪い取る。

「っ！？」

能天使の肩から血が噴出す。

痛みに顔を顰めながら、血にまみれた槍を構えるとその切っ先を女天使に向ける。

「どうか彼女を見逃してください。そうすれば僕は…。」

苦しげに肩で息をする能天使に女天使は憎悪の視線を向けた。

「…貴様！」

「神はおっしゃいました。親切を受ければそれを返せと。私はそれ

に従うまで。」

「煩い！死神に加担するお前が神の名を語るな！」

「そんなつもりはない、と…。」

「ふん！所詮は誘惑弱き能天使よ。ならばこの女ともども悪魔の使徒をこの場で葬ってくれるわ！」

「っ！あ！」

失血で力の弱っていた能天使が構えていた槍はあつけないほど簡単に女天使に奪い返される。そのまま切っ先を返され、その穂先が鋭くこちらに振り下ろされる。

「二人ともまとめて消えされ！」

鋭い刃が身に迫る。私は思わず目の前に立つ能天使に手を伸ばし、庇うように後ろから抱きしめた。

「っ！」

彼の身体は私よりはるかに大きかったけれど、意外なほど軽くて私の腕の中にあっけなく倒れこんでくる。

その身体を覆うようにかぶさる。これ以上自分を庇って傷ついて欲しくなかった。

おじちゃんみたいに死んで欲しくない。

それで女天使の攻撃を防ぎきるなど出来はしないだろうけれど、盾くらいにはなれる。

痛いのはいやだけど。私は来るだろう痛みと衝撃に構えるために目を閉じた。

第十四羽 誇り？

だが。

その槍の先がこちらに届く前に高い音がして槍の穂先が切り落とされた。

驚いて目を開けて飛び込んだのは、一瞬の一閃。気付くと赤い死神が私たちの目の前で女天使に対して鎌を振るっているのが見えた。

「アストラル！？」

「無事か？」

女天使が鎌の一閃で跳躍して離れたのを見計らって、アストラルがこちらに駆け寄ってくる。その鎌は油断なく構えた姿は、血に染まっていた。

「アストラル！？その血…。」

「大丈夫だ、ほとんどが返り血だ。」

こちらに背を向け間断なく敵をけん制しながら、答える。

それがいくらなんでも強がりだということにはわかった。血の浴びていないアストラルの顔はどこか青白く、彼自身も失血していることは伺えた。アストラルは視線を前に固定したままのつぶやいた。

「…まさか、お前に助けられるとはな。」

その言葉は私が庇ったままの能天使に向けられたものだと思われるまで少し時間がかかる。

「…僕は貴方を助けた覚えはない。」

私の腕の中で肩を血に染めてぐったりとした能天使が、アストラルに弱弱しく視線を向ける。

「同じことだ。我が伴侶を守ってくれた。礼を言う。」

「…！死神に礼を言われることになるなんてね…。」

天使の顔に自重の笑みが浮かべたかと思うと、一瞬顔を顰めて力が完全に抜ける。

「っ！あ…。」

顔を真っ青にして動かなくなった彼が死んでしまったのではないかと、青ざめたが、その胸がかすかに上下しているのを見て、気絶しただけだとわかってほっとする。

「ふん！裏切り者が。死ねばいいものを！」

女天使が吐き捨てたあまりの言葉に私は思わず、言い返していた。

「なっ！それが、仲間に対する態度！？」

「……なんだ、女。私たちに意見するきか？」

面白くなさそうに片眉を上げる女天使に一瞬怖くなるが、だが怒りのボルテージのほうが高くて口は止まらない。

「この人もあんた達のお仲間でしょうに。何で殺そうとするのよ！天使ってもっと慈悲深いものなんじゃないの？」

だが女天使は天使とは思えないほど、こちらを見下したような態度で高慢に言い放つ。

「ああ。神の御使いたる天使は慈悲深いものさ。神への尊い祈りを捧げるものには救いを与えるが、墮落を与える悪魔や死神に組するものに容赦などない。それが私たちの信念であり誇りだ。」

胸を張って女天使が誇る。彼女の立場からすれば、確かに一理あるだけ。

「そんなの差別じゃない！偏見よ！そんな考え方しか出来ない部下しかもっていない神様なんて意外にたかが知れているのかもね。」私の言葉に流石の女天使の顔に朱が昇る。

「くっ！貴様！神に対するなんと言う侮辱！消しさてくれる！」

天使の声とともにその手から放たれた光が私を目掛けて飛んでくる。放たれては爆発する光玉。地面にクレーターを作る威力のあるあんな光に当たって無事ですむとも思えない。だが恐怖で動けずにいると横から突然大きな影が覆いかぶさってきた。

第十五羽 捕食者？

「つく！」

光は影、アストラルの背中に突き刺さる。驚いて目を見開く。肉がこげるような嫌なにおいが立ち込めた。

「…あ、アストラル…なんで。」

相当痛いのだろう顔をゆがめる死神に私は血の気が引く。

「っ！…とうとういかれたか？いかに一万目だとして、たかが人間を、身を挺して守るとは…。」

アストラルの影で見えない女天使が驚いたような声を上げる。ばさりと言う羽音が聞こえて女天使が離れる音がする。

「まあ、いい。今が好機！これを機に死神を消してくれる！皆構えて、打て！」

声とともに目も開けられないほどの光量の熱量がアストラルを襲う。だが、アストラルは私をより深く抱え、動かない。

無数の光がアストラルに突き刺さる。その度にじゅうじゅうと嫌な音が聞こえる。

私は訳がわからなくなる。

「…なんでいけないの！」

もしくは、さっき私を入れたサークルみたいに結界をはるとか。だが、その疑問には他の声が答えた。

「ふん！最早結界を張る力もないようだな。いくら一万目とはいえ、そんな女と堕天使を置いて一人逃れれば死ぬこともないだろうに。」

その言葉に私は目を見開いた。

「…もしかして、私のせい？」

もしかしなくてもそうだろう。この場で女天使が嘘を言つて得することなどない。

アストラルの腕が更に私をしっかり守るように力を込めた。

「…気にするな。主天使の攻撃ごとき蟻に噛まれたようなもの。大丈夫だ。…お前はその天使を置いてはいけまい？」

「っ！」

アストラルの顔は抱え込まれる私には見えない。だがその声に力がなくなってきたのを感じて私は慌てた。

「アストラル、アストラル！だめだよ。どいて！」

「くっ！」

腕で強く彼の身体を叩いてどかさうとする。だがびくともしないその身体に伝わる天使達の攻撃の強さに焦りが募る。

「なんであんたが私を庇うの？」

「お前は俺の一万入目の…。」

「だったらすぐに私の魂を取り込めばいい！」

そう、庇うのではなく、魂を抜き取り早く取り込んでしまえばいい。そうすれば、彼の力は戻り、あの天使達に遅れをとるようなことにはならない。

それがわかって、漸く私は冷静になれた。

「奪っていいよ？私の魂。」

「っ！？」

覆いかぶさるように私を守るアストラル。その瞳の色が私の言葉で一瞬凶暴に猛るのを私は見逃さなかった。全身が震えるようだったが、それを押さえ込んで、できるだけ平然とした声を出した。

「それで力が得られるんだろう？通算一万入目の魂。そのために生きてきたんでしょう？何を躊躇う必要がある。」

アストラルの紅玉の瞳が揺れる。

天使達からの攻撃は止む気配を見せない。

百人単位いる翼の生えた人たちの一斉攻撃を私を守りながら一身に受けているのだ。

いくら大悪魔クラスの死神だとて、そう持つとも思えない。

「何を考えている？早く！」

「…お前は、」

「え？」

「…私が怖いのだろうか？」

悲しそうにアストラルの顔が歪む。その表情に驚いて私は動きを止めた。

「俺は魂の捕食者だ。お前にとっては天敵に当たる。先ほどお前は俺に震えていた。」

「…だから？」

「なぜだろう。お前の怯える姿は見たくないんだ。」

アストラルの手が私の頬を包み、不器用に微笑んだ。

最初に会ったときには高慢でこちらの話を聞こうとしなかったアストラル。

私はその表情に目を見開いた。

なんでこんな顔をするのだろうか。私は彼に何もしていないのに。

第十六羽 同化？

「なぜ…。」

「わからない。だが、お前は…似ている。同じ…だからか？」

「…？誰に？」

そのときひととき大きな光がアストラルの背に飛来し、大きな音を立てて破裂した。

「がつ！！」

「アストラル！」

苦しそうなうめき声に、私は焦った。

「もう、いい！早く！私は死んでもいいから！どちらにしても、このままでいれば二人とも助からない！せめてアストラルだけでも！」

「…なぜ？」

「なぜ？そんなの決まっている。」

私は死神に微笑んだ。

「アストラル。私はお前に死んで欲しくないよ。」

私のせいでアストラルに死んで欲しくない。アストラルの目が見開かれる。

その顔がなんだが間抜けですこし笑えた。

一瞬だけ、天使の攻撃が止んだ。

その隙に私は腕を伸ばしアストラルの首に絡めた。

そのまますがりつくようにその頭を首筋につけるように抱え込む。

「ほら、痛いのが嫌だから、一気に。がぶつと。一瞬でショック死できるようにしてね。痛いのやだから。」

「…お前な。俺は吸血鬼ではないぞ。魔物と一緒にするな。」

惘然とした声が聞こえる。私はその表情を想像して少し笑った。

「そうなのか？まあ、いいじゃない。一万人目の魂。喰えば力が神と対抗できるくらい力を得られるんだろ？それで、あの空に浮いてるうざい白い奴ら倒してよ。おじちゃんの花畑をむちゃくちゃ

にして、流石に私も頭にきてるからさ。」

そつと腕を緩めて、アストラルの顔を覗き込む。今にも睨み殺しそうな無然とした顔にぶつかって私は苦笑した。

「ああ、でも痛めつけるだけにしておいて。流石にあの量の死人が出るほどだと気が引けるから…」

「…すこし黙っている。」

アストラルの視線を感じた途端、身体が石のように動かなくなった。だが先ほどと違って、震えはしない。

「…うん。痛くしないだね。」

私はそつと目を閉じた。

アストラルの身体が私に覆いかぶさってくるのを感じる。ずつと死にたかった。いや、ずつと何もしたくなかった。

ただ生きているのがいやで、でも死ぬ勇気もなくて。ただぼんやり流されていた。

感情も感動もない世界。まるでモノクロの映画を見ているような景色に心を麻痺させてきた。

だが。

一面の花畑が頭に浮かんだ。

おじちゃんのお墓。最後に私に見えたいと願ってくれた、死んでも尚育んでくれた大きなプレゼント。あれほど綺麗な色彩を最後に見れるとは思っていなかった。

鮮やかな色彩、涙が自然に溢れるほど美しい世界がこの世にあった私に、生きる力を与えてくれた。

それを考えると今の状況はちょっとおじちゃんには申し訳なかったけど。

次にアストラルの顔が浮かぶ。

赤髪赤目赤い装束の死神。強いくせに少しお人良しな死神。

私はずつとモノクロの世界を歩いてきた。

その中に突然飛び込んできたひどく色鮮やかな赤。

その強烈な色が世界にあったことを私に思い出させてくれた。

ねえ、アストラル。お前にわかるかな？それがどれだけ私にとってすごいことだったのか。

アストラルのおかげで私は色を見ることが出来た。

きつと、彼の存在がなければおじちゃんの花畑に行ってもあれほどの色を認識できたとは思えない。あんな風に泣けなかった。

ねえ、だからおじちゃん。貴方なら許してくれるよね。

私の世界に色を戻してくれた恩人のためにするこれからのことを。許してくれるよね。

アストラルの唇を首筋に感じる。魂を吸い取ると言うのはどういう行為なのかと思えば。

なんだ、やっぱり吸血鬼みたいじゃないか。

生き物の生存本能というべきか、急所である首に当たる感触に思わず震えるが、こればかりは生理現象のようなものだから、あんまり深く考えないで欲しいなとか、思ってみる。

先ほどみたいに傷ついた顔はアストラルに似合わない。

「っ！あっ！」

前触れなく、首に死神の牙が薄い皮膚を食い破る。

「あ、ああ！」

鋭い痛み思わず声が漏れる。痛くしないでっっていったのに！

痛みに潤む視界の中で、命の源と思しき血が首から溢れる。それを逃さないとはかりに首筋を死神の唇が這い、舐め取り取り込まれる。その度にどこか精神を吸い取られるような感覚に私の意識は急速に暗転し始める。

だが、首は痛い。痛いイタイタイ！

痛いつて感じて死ぬのだけはごめんだって思っていたのに。それだけが腹が立つ。

最後に睨んでやろうと、落ちる意識に最後に対抗するようにうつすらと目を開けると、包み込むような大きな翼が見えた。

「・・・？」

純白の六枚羽根。空を舞う白い連中のものより、多く、輝かしい。

（なんだ。アストラル。あんた。）
死神じゃないじゃん。そう思うと同時に意識が完全に閉ざされた。

第十七羽 理由？

誰かの鳴き声が聞こえる。

私の目の前に一人の女性を抱きかかえた男がいた。

純白の布を巻きつけたようなデザインの服。その上から細かな装飾の鎧を着ている。

神は美しい銀色をしてその髪がうねりを帯びて長く地に垂れている。男は背を丸めて女性に覆いかぶさるように泣いていた。顔は見えない。

男の腕の中の女性は白磁の美しい顔を仰向けに垂れ、その目は堅く閉じられ、ピクリとも動かない。その姿に既に魂のない軀であることが伺われた。

おそらく、女性はこの男の大事な人ではなかったのだろうか。

軀にしがみ付くようになく姿は何でだかひどく胸を締め付けられるような、悲しみに満ちてなんともいえない重苦しさを胸に感じた。

なぜこんな美しい二人がこんな悲嘆にくれるような状況になったのかわからない。だが、美しいが故に、とても悲しい光景だ。

「……まだ、ここにいたのか。」

突然後ろから声が掛けられた。振り向くと男と同じような服の上に鎧の変わりに長い前掛けのような布を纏った年配の男性がこちらに近づいてくるのが見えた。

男性は男の脇に立つ私に眼もくれず進む。

だがそのことに不思議には思わなかった。彼らに私の見えていないのはわかっていた。

だって、いくらなんでもこれだけ至近距離で見ている人間にこの泣いている男が気付かないわけはない。

その男性の声を聞くと、泣き崩れる男の方がピクリと動いた。

その姿に男性は聞き分けのない子供を見るような目つきで、だが視線を合わせないように気をつけながら男に声を掛けた。

「さあ、その人間の魂を渡すのだ。いくらお前が最強クラスの天使だとしても天に渡さぬ魂を持っていれば、力の強い死神に奪われてしまおうぞ。」

年配の男性は年下の男をなだめるように肩に手を当てる。だが男は俯いたままだ。

「…だが、天に渡せばどうなる。」

「そんなことはお前も知っているだろう。神によって裁定され、罪を許されるときまで浄化の炎にその身を焼かれて、次の転生まで待つ。それがこの世の理だ。さあ。」

肩を引かれるが、男は女性を離そうとはしない。

「なぜ、なぜ？この人が死なねばならなかった？消えなくてはならないのだ。」

男の駄々とも取れる言葉に年配の男性が溜息を吐いた。

「消えるのではない。輪廻の中に舞い戻ってまた、生まれることは出来る。」

「だが、それはこの人ではない。」

男が女性を抱く腕に力を込めるのが見えた。ちらりだけ顔が上がる。

長い髪の隙間から相貌だけが見えた。

その瞳は涙で濡れ真っ赤になっていた。だがそこに宿る光はどこか凄みを帯びて、見るものに恐怖を与えるような色を称えていた。

男が静かに言葉をつむぐ。

「これが神の定めた理だというのなら。」

「…！？何を！？」

ぶわりと風が吹いて、男と抱えられた女性の着ていた衣の裾がゆれる。

「この人がいなくなることが、この人を私から奪うことが神の意思だと言っのなら。」

男の髪が風になびきその双眸がはつきり見えた。

その目が深紅に染まるのが見えた。

男の身体からは赤みを帯びた金色の炎が立ち上る。だがその炎は男と抱えた女性を焼くことはない。

「私は抗おう。」

「！お前。くっ！？」

男性が慌てて、男の抱える女性に手を伸ばそうとする。だが。

「ぎゃあ！」

突然男達を包んでいた炎が女性を奪おうとした男性の腕に絡みつくと、その見たままの熱量を持って、男性の皮膚を焦がした。その痛みにより男性は悲鳴を上げて男達から離れた。

火傷した腕を押さえながら、男性は恐ろしいものでも見たかのような目を男達に向ける。

「おまえ！そんなことは神がお許しにならない！」

「許さなくていい。」

男は腕に抱えた女性落とさないように慎重に立ち上がる。

ものすごい風が彼らを中心に吹き荒れる。その風は私にも有効なように、それまで踏ん張って耐えていたが、だがそれも限界に近づいている。

「この人を私から奪うことはたとえ神でも許さない。」

男の背中から大きな翼が現れた。光を帯びた六枚羽根。

「永劫のときを。決して離れない。この人の魂は俺のものだ。」

慈しむような恍惚とした表情で男は女性の軀を抱えなおし、ひときわ大きく羽を動かした。

その瞬間に吹き荒れた突風に私はとうとう吹き飛ばされた。くると吹き荒れる風に翻弄されながら飛んでいく私の意識に最後に空から、かの恋人達に向かってくる大きな手が見えた。六枚羽根の天使は気付かない。

私は慌てて、手を伸ばし、声を上げた。私の姿は見えないだろうから、声も聞こえないだろうから意味がないとは思っただけ。そんなことはどうでもよかった。

「アストラル！上え！」

髪の色も姿も違っけど。わかった。

そのとき。男の顔が女性からはずれ、一瞬私の方を見た気がした。だが、それを確認する暇もなく私は突風に吹き飛ばされるまま意識ごと、その場所から遠ざかった。

第十八羽 白？

ここはどこだろう。

気付くと、私は真っ白な何もない空間にいた。

先ほどの男とその恋人がいた世界とは明らかに違う。

ここがいわゆる死後の世界という奴だろうか。

いや、だが私は死神に契約されて死後の魂は死神に取り込まれることになっていたはずだ。

ということはここは死神の中なのだろうか。

それにしても何もない。真っ白だ。

モノクロの世界に逆戻りしたような感覚に苦笑が漏れる。

あの時、アストラルにおじちゃんの墓の光景を見せられて、忘れていた色彩を思い出したはずなのに、結局行き着くところはモノクロの世界とは。

だが、それでもいいと思った。

先ほど最後に見た光景を思い出す。きっと大丈夫だ。

あ、でもあの私を助けてくれた能天使だけは見逃して欲しいと頼むのを忘れていたことを思い出す。だが、最早彼にそれを伝える術はないから、彼がそれに気付いてあの能天使だけ見逃してくれることを祈るしかない。

私は周囲を見回す。見事にどこまでも白い空間。

この先に何があるのか、いや、道があるのかすらわからない空間の中。だがただ経っただけでも埒が明かない。とりあえず歩いてみることにして、白い闇に足を踏み入れようとしたときだった。

『どこに行くんだい？』

声がした。高いような低いような不思議な声だ。私が慌てて周囲を見回すが声の主らしき人の姿は見えない。

「だれ？」

白い闇に向かって呼びかけたが、誰の気配もない。だが、声はまる

で耳元にささやかれるようにはつきりと聞こえてくる。

『この先には何もない。』

遠く近くなり響く不思議な声。だが不気味な感じはなく、不安は感じなかった。

『ここは君の来るところじゃないよ。居場所はないよ?』

「え? そんなはずは?」

だって、アストラルがいつていた。私は彼に取り込まれる魂の一人目。それならばここは私がいるべき場所であるはずなのだが。

『ああ、だからお帰り。まだ君が来るにはここは早すぎる。』

「...なぜ?」

なぜここにいることが早すぎると言っただろうか。

どこに帰れというのだろうか。

ここはアストラルの中ではないのだろうか。飲み込まれてその一部になったのではなかったのだろうか。

『君はまだ何も見てはいないから。』

「何を...」

『お帰り。』

優しいが、有無を言わせない声音に私の意識が曖昧になる気配がする。

『君にはまだいろいろ見るものがある。感じなさい。触れなさい。』

世界を。』

どんどん持つていかれる意識とは裏腹に聞こえる声は力強く私を安心させる。

『人は幸せになるために生まれたのだから。』

最後までその声の主は姿を見せなかったけれど、なんとなく私にはその主がわかって、最後に私はつぶやいた。

「...もう一度会える? ...おじちゃん。」

懐かしい笑顔が浮かんで、それから頷いてくれた。

私は幸せな気持ちになって、急速に持つていかれる意識を手放した。

第十九羽 まだ早い？

うつすらと目を明けると、赤い髪の死神の顔が見えた。

唇に相手の名前を載せようとするが、かさかさに乾いた喉が、少し動いただけで結局音になったのかわからない。

息を吐くと同時に首筋の痛みに気付く。それにそれまでの記憶が一気に蘇り、覚醒する。

「ここは…？」

慌てておきようとすると、その額にアストラルの手が伸びて、そのまま私が起き上がるのを阻止する。

「…まだ、寝ている。」

その低い声に、優しいが有無を言わせぬ響きを感じて、私は言われるままに横になる。

再びベットの住人になった私にアストラルはそつと額を撫でた。

その少し低い体温の心地よさにほっと息を吐く。

「ここは、お前の部屋だ。」

何で知っているのかわからないが、まあその辺は死神。あまり追求してはいけないだろう。

それより、聞きたいことがあって私はアストラルの顔を見上げた。

「あの後どうなったの？」

「ああ、私の本当の力に恐れをなした天使どもは散り散りになって逃げていったよ。」

アストラルは微笑ながら、私の髪を梳くように指を動かす。その顔を不思議に思いながら私はさらに口を開いた。

「…私、生きているの？」

「ああ。」

「…なんで？」

単純な疑問だったのだが、アストラルの顔から微笑が消えた。

「…死にたかったか？」

私は暫く考えていたが、ゆっくり首を振った。

自分でも不思議だが、前まで感じていたいつ死んでも構わない、むしろ死にたいといった気持ちがなくなっていた。

「…そうか。」

なぜかアストラルが安心したように息を吐くのを不思議に思う。

「…そうじゃなくて。どうして、アストラルは私の魂を取り込まなかったのかっておもって。」

「…それは。」

「ねえ、なんで。魂を集めているの？何で神様になりたいの？」

「…なんで、そんなことを聞く？」

「ん、夢を見たの。」

「夢？」

「うん。アストラルが女の人を抱えて泣いているの。アストラルはその人の魂とずっと一緒にいたいって。…でもね、その後に空から大きな手が伸びて来てね。」

私の言葉にアストラルは何か考え込むような仕草をしたが、やがて溜息を付いた。

「…そうか。」

「あれって、本当にあつたこと？」

私にはあの夢が夢の出来事だったとは思えなかった。あんなに鮮明で悲しい夢。

それにあの六枚羽根の天使のアストラル。私の妄想の中だの夢にアストラルのあんな姿が出てくるとは思えない。案の定と言うか意外に素直にアストラルが頷いてくれた。

「…ああ。そうだな。俺が一番最初に人の魂を欲しかったときの話だ。」

「…なんで見たのかな？そんなの。」

一番の疑問はそこだ。だが、アストラルはなんでもないことのように説明してくれる。

「おそらく、お前の魂の一部を俺が取り込んだからだ。同化現象と

でもいいのか。」

アストラルが言うには、あの時アストラルは私の魂の一部を取り込んで力の一部としたらしい。完全な力は戻らないが、主天使を一気に追い払うくらいの力を取り戻し、あの場を収めた。その際に取り込んだ魂の一部がアストラルの中の過去を見たとのことだった。

「…じゃあ、あの人がアストラルの最初に魂を取り込んだ人？」

私の質問になぜかひどく暗い顔をしてアストラルが首を横に振った。「いや…。」

その様子にまるで自分がいじめてしまったような感覚に陥り、むずむずした。

「？なんで？アストラルはあの人の身体を持っていたし、あの場で取り込んだんじゃないの？」

「お前も見ただろう？空から降りてくる手を。」

「え。あ…。」

「あれは神の手だ。奪われたんだ。すべて。身体も何もかも。」

私は息を呑んだ。

「神様…。」

あれが。夢の中で見た大きな手を思い出して思わず震えた。

アストラルは暗く遠い目をした。

「ああ、輪廻の輪に戻され、今はどこにいるのかすらわからない。」

「…アストラルは待っているの？あの人が生まれ変わるのを。」

だから、魂を集めているのだろうか。死神に身を堕として、人の私には知りようもないときを生きながら。

「一万人の魂を集めて神様に対抗すると言っるのは嘘？」

アストラルがこちらをじつと見た。

「いや。一万人の魂を集めれば、力を得られるのは本当だ。だが、それが神を凌駕するかはわからないがな。」

自嘲じみた顔。思い出す記憶の中の巨大な腕。あれに対抗するだけの力というのはいかばかりなのか。

「それにたとえあの人の魂が生まれ変わったとしてもそれは別人だ。」

魂は浄化されれば、別人に生まれ変わる。その人が生きてきた全てを焼き尽くしてなかったことにして。」

その顔があまりにも悲しくて、苦しそうで私は慌てて慰める言葉を搜した。

「でも、魂が一緒であれば一応その人と同じなんじゃ。」

「いや、別人だよ。まったく違う。」

「それじゃあ……。」

何のために集めているのかと聞こうとして、手で口を塞がれた。

「もう寝ろ。」

「え？」

口に置かれた手が、ずれて私の視界を覆い隠す。

その瞬間、猛烈な眠気に襲われ、目が開けていられなくなった。

「っ！…アストラル？」

「そして何もかも忘れてしまえ。」

「え？」

意識が白濁する。その度に何かを奪われる感覚に私は抗おうとした。だが、もがけばもがくほど白い闇に囚われて沈む感覚に焦る。

そこで、初めてアストラルが私の記憶を持っていこうとしているのに気付く。

「う、や！アストラルっ！」

せつかく会えたのに。忘れたくない！私は我知らずに泣いていた。そんな私にそつとアストラルがささやく。

「ああ、お前は別人だよ。あの人と同じ魂を持っていようと。生まれて生きた時の分だけ別人だ。悲しい記憶なんてない。」

アストラルの顔を見たいのに、手で塞がれて見えない。彼の顔を忘れたくないのに、あの強烈な赤い色を白い闇が覆い尽くしていく。

「思い出す必要なんてない。」

唇に柔らかな感触が振ってくる。涙が止まらなかった。

「忘れて、そして幸せに。まだお前は私に捕まるには早すぎる。」
その言葉が最後に私の意識は完全に闇に取り込まれた。

第二十羽 鮮やかな世界

「おっはよー！」

挨拶の言葉とともに、後ろから突進された。

「え！わっ！」

真夏の朝。暑いのとまだ眠いので呆と駅で電車を待っているときにされたものだから、私は危うくホームから転がり落ちそうになった。そこに突然横合いから手が伸びて、ホームに引き戻される。

「っ！」

驚いて、その手の主を見る。私の手をとって引き戻してくれたのは隣で電車待ちをしていた男性だ。

かなりの長身の男性だ。見上げないと顔が視界に入らない。年は二十代前半くらい。顔立ちは日本人ばなれした深い彫りをしていたが、シャープなデザインのサングラスを掛けているので全体はわからないがかなりかっこいい雰囲気だ。

この暑いのにニット帽に全身黒い服を着て、腕には何柄なのかわからないタトゥーをしており、ジャラジャラと銀のアクセサリーをつけていて一瞬怖い雰囲気だ。

おしゃれなのかアクセサリーのほとんどに赤い宝石がついていてともすれモノクロの印象の強い服装にアクセントを加えていた。

「あ、ありがとうございます。」

一瞬、姿に見惚れたが、助けてもらったのを思い出してお礼を言う。そのまますぐに離してもらえるのかと思えば、そうでもなく、なぜか男性はこちらの手を取ったまま、こちらをサングラス越しに凝視してくる。

「？」

下手にイケメンなので少し心音が高くなるのを感じる。一体なんなのかと思って硬直していると、突き飛ばした友達が声を掛けてくる。
「ちょっと、大丈夫！？」

「ん、平気だよ。」

友達が話しかけてくると同時に、手が離れる。それがなんとなく寂しいと思うとは、いつから私はイケメン好きになったのか。

「おい。」

「え？あ、はい！」

突然その男性に再び話しかけられ驚いて振り返る。が、その視線は私ではなく友達に向いている。

「え？私、ですか？」

友達が目を白黒させている。そりやそうだろう。突然駅で知らない男性に話しかけられることはあまりない。

だが、気にせず男性は友達に視線を向けながら不機嫌そうに怒鳴った。

「電車の前列にいる人間を押せばどうなるかぐらいわかるだろう。気をつける。」

どうも、私を突き飛ばしたことに對して怒っているらしい。まあ、危なかったが。

「え、あ、の。あれは私がちゃんと受け止め切れなかったというのもあるし。」

「お前は黙っている。俺はこの女と話しているんだ。」
フォローを入れようとする私に向かって、怒鳴る。

普段なら、それでも穏やかに対応するのだが、なぜか今日に限ってそれになぜかカチンときた。

「そんな言い方はないでしょう？」

「っ！何でお前が怒るんだ。」

私の剣幕に男性が引く。隣で友達も驚いたような顔をしていたが、気にしなかった。

「そっちがけんか腰なのが悪いのよ。助けてくれたのは感謝するけど怒鳴られるいわれはないわ。」

「けんか腰って……。これが地だ。」

「地だからって。許されるものでもないでしょう？言い直しなさい

よ！」

「ちよつ！マー子。いいって。ごめんなさい。私が悪かったです。もう、しません。」

「っち！気をつけるよ。」

男性は捨て台詞を吐いて居辛くなったのか、私たちの並んでいた列から離れていく。

「はあ、びっくりした。」

男子絵の姿が見えなくなったのを確認して、友達が盛大に溜息を付く。

「でも結構イケメンだったわね。もう一度会えないかしら。」

「えゝ。確かに顔はいいけど、態度が悪くない？」

「あれくらいどうってことないわよ！それに今時駅で女子とはいえ学生に注意できる度量。かつこいいわ。」

「あつそ。」

マンガならば目をハートにさせん勢いで男性の去っていった方向に視線を送る友達に呆れる。だが、その視線に答えた様子もなく友達はこちらを振り向いた。

「でも、ちよつと！マー子どうしたのよ、一体今日は。」

「どうしたのって言われても。」

らしくないことをした自覚はある。

だが、なんだかカチンと来たのだ。しょうがない。

「マー子、人と対立するの嫌いでいつも綺麗に纏めちゃうじゃない。相手の意見を尊重することが多いし、あんまり自分の意見言わないし。だから意外。」

「…そう？」

まあ、それは確かにそうは思う。私の信条としては人と対立するより、調停のほうに向いていると思っていたし、人と対立するのも面倒だから、極力誰かの意見に対立するようなことはなかった。だから、おそらく普段の私なら決してこの場合怒鳴りあいになんかならずに、素直に謝りつつ、双方あまり悪い印象を与えず、なあなあ

で済ませていただろう。

それに、普段ならああいう手合いには決して自分から近づいたりしないし、決して相手を怒らせるようなことはしない。でもなぜかあの男性は大丈夫な気がしたから、何の気兼ねもなく言い合えた。初対面のはずなのに不思議だ。

「まあ、らしくなかったのは認めるかな。」

「そうだよ。あ、らしくないと言えば昨日はどうしたのよ。突然いなくなるから心配しちゃったじゃないの。」

私は難しい顔をして考えた。

「…ごめん。体調悪くなっちゃって、ベンチで休んでいるあいだにはぐれちゃって…」

私は素直に謝る。駅までは一緒だったのだが、どうも私がベンチで休んでいるのに気付かず友達が電車に乗ってしまったため、何も言えずに突然消えたみたいに思われたらしい。

だが、私もメールすればいいのに、しんどさから怠ったのも事実。ここは素直に謝っておいたほうがいい問題だろう。

「うん。まあ、仕方ないけど。これから赤ちゃんとはぐれるならメルくらいしてよね。心配するじゃない。」

それだけ言々と友達はまたたわいもないおしゃべりを開始する。

それに適当に相槌を入れながら考えた。

ああ、それにしても昨日に体調不良になるとはついていないと思った。

昨日はおじちゃんの命日だったから、あの事故現場に行こうとおもったのだけど、体調が悪くなってやめた。あとは家の中で養生していたのだ。

ベットの中でゆっくりしていたときに見た夢を思い出し、少し思い出し笑いする。

「…マ―子。聞いてる？」

「え？あ、ごめん。」

どうやら自分の考えに夢中になりすぎて相手の話を聞いていないこ

とがばれたらしい。

「…大丈夫？昨日も体調悪かったんでしょ？今日も休んだほうが。」

「大丈夫よ。本当に！」

「…だって、マ―子がボンヤリしながら、遠い目をしてにやついて
いるなんて天変地異の前触れかと。」

「どうやら思い出し笑いをしているのを見られていたらしい。」

私は少し恥ずかしくなって、わざと怒ったように答えた。

「…失礼な。ちょっと夢を思い出してただけよ。」

「おや？現実主義なマ―子にしては珍しいね。どんな夢？」

聞かれて話そうとしたがやめた。だって昔のことを話していない友達に、おじちゃんのお墓参りに行ってその花畑がすごく綺麗だったって話すわけには行かないから。

「…秘密。」

少し微笑みながら言うとか何を勘違いしたのか、友達が声を上げた。

「ああ。それは彼氏との如何わしい夢なんですよ？」

「はあ？」

「さあ、はけ！どんな夢だ。」

「そうじゃないったら！もう！」

「うゝん！じゃあ、今はいいけどいつか話してよね。」

「…まあ、いつかね。」

こんな話を友達に出来る日が来るとは思えないけれど、でもいつか話せる日が来るといいと思う。

あの夢を見たせいだろうか。私は前日までの自分では考えられないような前向きな気分で見れるようになっていた。

とはいえ、世界はまだモノクロにしか思えない。だが、そうじゃないことがわかるというか。

夢の中の世界の色鮮やかさ、あの色が現実にあるということが今は信じられる。

多分気付けていないだけなだと、なぜか思えるようになっていた。それだけで私は随分と自分の呼吸が楽になったことがわかった。

何も変わっていない世界。だけど何か変わった世界に私は穏やかに視線を向けた。

「……マー子。」

隣で友達が不思議そうにこちらを見ている。

「何？」

「昨日、何かあった？」

「……何で？」

「ン？なんだかね。綺麗になったから。」

「……行つとくけど夏休みの数学ノートは自力で遣りなさいよ。」

「いえ、かなり当てにしますです。でもお世辞じゃないんです。本当。」

力説する友達に、でも褒められて悪い気はしないから口元を緩めた。

「しょうがないな。褒めてくれて、ありがとう。」

「どういたしまして……て、あ！」

不意に何か思い出したように声を上げた。

「そう言えば持ってきた？」

唐突に話を変えられ付いていけず、聞き返す

「え？何が？」

「サイン帳。もらってないのマー子だけなんだけど。」

そういわれて、そう言えばそんなものを頼まれたのを思い出す。高校のクラス替えからこっち、クラスでは自己紹介を兼ねたサイン帳が出回っていた。私もいろいろな人からサイン帳の記入を頼まれており、面倒だが、それを書いては返していた。

「……もしかして忘れてた？」

「そ、そんなことはないよ。ちゃんと書いてきたよ。はい。」

少し心を読まれていたことに焦りつつ、鞆を開けて彼女から預かっていたサイン帳の一枚を取り出して渡す。

「ん？おけおけ。空白はないね。マー子は自分のこと隠したがるからね。書きたくない部分は書かないんじゃないかって思ってたんだけど。」

少しどきりとする。自分ではあまり自分のことをあれこれ話すことは嫌いだっただけ、それを他人に悟られないようにうまく立ち回っていたつもりだった。だが、ばれていた。

「なに驚いているのよ。まさか隠したがりかばれてないか思ってた？」

「…ちよつとね。」

「まあ、結構さりげないからほとんど知られてないけどね。マー子、立ち回りうまいから。よっ！詐欺師！」

「ちよつと！それは。いくらなんでもひどくない？」

わざと怒って見せると、目の前で指を振られた。

「ちちち。ひどくじゃないよ、事実ジャン。我々の中では周知の事実。友達甲斐のない奴だと私はいつも心を痛めております。しくしく。」

わざとらしく泣きまねをする友達を小突く真似をする。

「友達甲斐がないだど？ほう、友達じゃない身としてはもう宿題写しなんてさせられないね。」

「わゝ、それは！ごめんして、マー子様！」

「うむ、わかればよいのよ。わかれば。」

胸を張ってちよつと威張って見せると友達が笑う。いつもの風景だ。「もうゝ、やっぱりなかなかマー子には勝てないわ。サイン帳に弱点でも書いてないかしら…あれ？」

サイン帳を見ていた友達がおかしな声を上げる。なんだろう。そんな声を上げられるようなへんなことを書いた覚えはない。覗き込むと、友達の指が、ある項目のところで止まっていた。

「ん？好きな色がどうかしたの？」

「え？うゝん。ちよつと意外だったから。」

「そう？」

私は友達からサイン帳を受け取って、日に透かしてみる。それを横から覗き込みながら友達が唸る。

「マー子なら黒か白って書くと思っていたから。」

「ん、そうだね。私もちよつと書いていて不思議だったんだ。」

私の答えに友達の顔に疑問符が浮かぶ。

「え？なにそれ？」

どういうこと？聞かれて、私はなぜだか楽しくなって微笑んだ。

「でも、これがいま一番好きな色なんだよ。」

透かした可愛いファンシーなイラストで印刷されたサイン帳の項目には少し広めに空欄が取られている。私は好きな色の項目にただ一つこう書いた。

赤。

エピソード

駅のホームではしゃぐ女子高生二人から離れつつ、真夏にニット帽を被った男、アストラルは暫くホームを歩く。今は朝のラッシュの時間帯だ。昼間はがらんとするほど利用者の少ない駅でもこの時間帯では人にぶつからずにすむほどに空いてはいない。

暫く、人にぶつかりながら歩くが、やがてその窮屈さに男はイラついてきた。

「っち。鬱陶しいな。」

男はそつと人ごみを掻き分けて、ホームの端まで降りると徐にその長身を空中に躍らせた。

少しの落下の後、男の身体が宙に浮くとそのまま上昇する。

誰も、目の前で起こっている不思議な光景に気付いてはいない。

男がそこらにいる人間全体に幻視の術をかけていたからだ。彼らにはきっちり彼の姿は見えているが、認識できない。そういった状況があつた場に作り出されていた。

人間というのは不思議な生き物だと男は思った。

目の前にあるもののなかにそれを見ようとしな。見えないことに気付きもしない。そこにあるのに認めようとしな。

そつと駅舎を振り返る。少し高度を上げたために、そこからは駅舎が一望でき、その際で戯れる、二人の女子高生の姿が見えた。

その片割れに目を移す。助けてやったのに口の利き方がなつてないと怒鳴つた少女。

彼女もその一人だつた。自分の過去のつらい思い出に我知らずに幸せを放棄して、見えていたはずのものを見ないようにしていたうちの一人。

彼の最も愛しい女性と同じ魂を持った少女の姿に我知らずに口元が綻ぶ。

「アストラル様。」

そのとき、弱弱い声とともにふらふらとこちらに近づく姿が見えた。

「どうした？レヴィ。」

純白の羽根を生やした金髪の男だ。それは少女の守護天使だった能天使だ。名をレヴィリユースという。めんどくさいのでレヴィと略したら、なんとなく情けない顔をされたのを思い出す。

今は少女を助けたことよって、死神であるアストラルに加担したことになって墮天使扱いされて、地上に落されている。それをアストラルが拾ってやったのだ。

「は、はひ。もう！置いていかないくださいよ。」

金髪を短くしてキャップを被っているが、元々が派手な典型的な天使の容姿の持ち主である。駅の周辺を歩いていると次々と女が寄って来て、取り囲まれていたのだ。

うまく姿隠しが出来ない様子で、その駄々漏れの光が女を寄せ付け、それをうまく避けることも出来ずにいたので、助けるのも鬱陶しいのでそのまま置いてきたのだが。

「お前が早く来ないからだろう？…それより、おまえその姿を人間に見られなかっただろうな。」

アストラルは顔にかけたサングラスを取りながら、レヴィリユースの翼を見た。

「それは、当たり前です！いくらなんでも羽を広げるところを一般の人間に見られるほど墮ちてません！」

「墮天にはされたがな。」

「しくしく。」

アストラルの言葉にレヴィリユースが泣く。

「僕だって、僕だって好き好んで、墮天されたわけじゃ…。」

きらきらと天使オーラを走らせながらむせび泣くレヴィリユースにアストラルはゲンナリする。女なら瞬殺の天使オーラは男で更に死神であるアストラルには当たり前だがまったく効果はない。

「お前が墮天されたのもある意味俺のせいでもあるからその辺はち

「やんと地上での生活の世話はしてやっているだろうが。」

「そうですけど…。」

更に泣き崩れる輝かしくも美しい能天使にもしかしてこいつ自分の世話なくても女のところにくらでも転がり込めるんじゃない、と思ってしまう。

「地上が嫌なら帰ればいいだろう？ 場合によっちゃ、天だっていいわけくらい聞いてくれるんじゃないのか？」

まったく自分でも信じていないが、もしかしたらと思った可能性を口にしてみるが、レヴィリユースは悲しげに首を振った。

「…無理ですよ。天は墮天にはひどく敏感です。最大の禁忌。一度でも墮天の烙印を押されたものは近づいただけでも雷に打ち落とされて消されてしまいます。」

それはアストラルも元天界の住人であつたから知っている。だが、彼がそうであつたのははるか昔のことだ。もしかしたら少しは変わっているのかも思ったのだが。

「…今でも変わっていないんだな。」

「ええ。残念ながら。」

「…じゃあ、仕方がないじゃないか。それとも本格的に堕ちて魔界にでも行ってみるか？ 案外慣れれば住み心地は悪くないぞ。」

「そ、そんなの！ だめですよ！ 無理です。神がお許しになりません！」

魔界の言葉だけで怯える天使にアストラルは半眼になる。

「そうだろうな。お前じゃな。」

レヴィリユースの派手さはむしろ輝きの好きな魔界の住人には受けるだろう。奴隷としてではあるが。だが、この性格の純粹さ、裏切られたというのに未だに神を信じているこの性格では魔界で持ちはずまい。

「ま。いくらでも時間はあるさ。ゆっくり今後の身の振り方を決めるといい。」

アストラルは中空に止まったまま、伸びをした。

全身につけたアクセサリーがじゃらりと音を立てる。

そんなアストラルを見上げる形でレヴィリユースが声をかけた。

「アストラル様は……」

「アストラルでいい。様付けなんて天使にされても気持ち悪いだけだ。」

「そんな！六枚羽根のお方を呼び捨てだなんて。」

レヴィリユースが慌てたように頭を下げる。その様子にアストラルは舌打ちしなくなった。

まったく、あの場がいかに窮地だったとはいえ、かつての姿を天使の前に晒すとは羞恥以外の何者でもない。あれは過去に捨て去った姿だ。

天使の階級は上級になるに従い、羽根の多さで決まってくる。最高位は六枚。それが、アストラルのかつて天使だったときの階級だ。

最も神に近しいものといわれていた。だが今はその称号も忌まわしいものであり、また彼の名も天界では禁忌として扱われていることだろう。それをこの年若い能天使は理解しているのか。

「生きている間に六枚羽根のお方の姿をご尊顔で切るなんて夢のようです。」

（わかってないんだろうな……。）

アストラルはつい遠い目をした。

「で？さっき何か言いかけなかったか？」

自分の世界にどっぷり浸りかけていたレヴィリユースを現実に引き戻すために声をかけると、一瞬わからない顔をしたが、思い出したように慌てて答えた。

「え？あ、その。アストラル様はこれからどうするのですか、と。」

「……これから、ね。」

アストラルは地上を見下ろした。視線の先には一人の少女。

「気長に伴侶が来るのを待つき。それまでは地上でぶらつくかな。」

「……マリア様ですね。」

「マリア、ね。」

幾崎マリア。それがあの少女の名前だ。

「……まったく、かの神の生誕に腹を貸した女と同じ名前だとはね。」

「そんな！恐れ多いです！美しく気高いお名前ですよ。」

「いいじゃないか。別に。俺死神なんだし。」

「理屈がわかりかねます。」

レヴィリユースがきぱりとはねつけた。普段は抜けさくで、なにやらせてもへたれなのに、神様のこととなるとたん聖人のように固くなる。

固いお目付け役が出来たようでなんと面倒なことになったと思う。地上に目をやればまだ友達とじゃれあっている少女の姿がある。飽きないことだと頬が綻ぶ。

だが、まあ。この天使と一緒にいるのも彼女が自分のものになるまでの間だ。

そうなれば、アストラルは魔界に帰るつもりだし、その頃ぐらいになればレヴィリユースも自分の身の振り方くらい固めてくれるだろう。

人の一生などアストラルにとってはまさに瞬きする間に過ぎ去ってしまうほどのときでしかない。だが、その間にあの少女はどれだけのことを学び、過ごすのか。

そうして、生きる間に輝いた魂は極上の光を帯びる。

かわした契約はいまだ有効だ。あの少女が死ねば、アストラルは迎えに行く。そしてそのときこそ永劫のときを共にするのだ。もうあの魂を天になど奪わせたりしない。

待っていたつもりはない。彼女に話したことは本当だ。

浄化された魂はそれまでの知識も記憶も燃やし尽くしてなかったことにする。同じ魂であろうと、かの女性とは彼女は別人だ。

混同するつもりもない。だが、それでもずっと望み続けたあの魂とともにある日が待ち遠しくてたまらない。

だが今更焦るつもりもない。本当に短い時間だ。待てばいい。

それまではじつと見守るつもりでいる。彼女の魂は既に彼のものだ。そして彼女の魂は彼でもある。生きている間は守るという契約もまだ有効。たとえ彼女が彼のことを忘れていても絶対だ。

「マリア様は…。」

地上の彼女を見ていると隣でレヴィリユースが神妙な顔で声をかけてきた。

「…なんだ。」

「本当に記憶を消してよかったのですか？」

「人として生きるのに必要ないだろう。」

「ですが、それではあまりに可哀想で。」

それはマリアがだろうか。それともアストラルがだろうか。

意味をとりかねたが、あえて聞き返したりはしなかった。

「可哀想なことなんてない。いずれはすべて思い出す。死んで魂ごと俺のものになればな。」

「でも、その間貴方は…。」

その言葉にどこに彼の慈悲が向いているのかを知ってアストラルは眉を顰めた。

「レヴィ。」

低く能天使の名前を呼ぶ。すると肩をびくつかせて能天使の顔が青ざめていく。

「…すみません。でしゃばりすぎました。」

慌てて謝る天使を一瞥し、すぐに視線を逸らす。

「…気をつける。」

そっと地上の少女を見下ろす。確かにあそこにいる少女に自分の記憶はない。アストラルが消した。あんな記憶はこの世界で、この国で生きる彼女には必要ないと思ったから。

そしてその思いは下で友人と戯れる彼女を見れば間違っていないことがわかる。

「…マリア。」

そっと、彼女の名前を呼んでみる。気付くはずはないけれど、

声を地上に投げかけると、不意にマリアが空を見上げた。目が合う。そう思ったのは自分だけだろうか。アストラルは愛しい魂に微笑んだ。

「お前は、未来永劫俺のものだよ。」

それだけを風にのこしてアストラルたちはその場から姿をかき消した。

エピソード（後書き）

なかなか最終話アップせずすみません。
これで最後。

最後までお付き合いありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3920f/>

モノクロ

2010年10月9日22時40分発行